

軍記物語における最期譚の研究

教科・領域教育専攻

言語系（国語）コース

高尾 和範

1、はじめに

軍記物語において、武将たちの最期というものが一つの見せ場になっていることは言うまでもない。そこで、本稿は、『保元物語』『平治物語』『平家物語』『太平記』という鎌倉時代から南北朝時代を代表する軍記物語について、特に最期譚という観点から考察することにする。

2、最期譚における死の記述

まず、最期譚における死の記述について、特にその中心をなす内容に焦点を当てて、各軍記物語を比較してみる。

(1) 最期を遂げる方法について

『保元物語』『平治物語』では、追い詰められた状況においても、武士が自害する例は見られない。それは、『保元物語』『平治物語』では、討死を武士としての価値ある死に方としていることと、臨終正念を保つために自害が忌避されていたことによる。『平家物語』では、自害も多少見られるが、その自害方法は固定しておらず、切腹に特別な価値を見出すことはできない。『太平記』では、自害、その中でも特に切腹が多い。それは、死に様や救済に対する考え方の変化が関係している。特に切腹の急増については、「ばさら」の思想的影響が考えられる。

(2) 最期をともにする人物について

『保元物語』『平治物語』『平家物語』において最期をともにする人物は、家族や乳母子に限られる。それは、その時代に武士団が乳母を紐

して成長していったことが背景にある。ところが、『太平記』では、最期をともにする人物が若党へと変化している。それは、その時代に、若党が武士団を成長させる紐帯の役割を担っていたためと考えられる。

(3) 最期における救済について

『保元物語』『平治物語』では、最期譚において概ね救済に関する記述がある。これは、武士としての死の論理よりも、欣求浄土的な死の論理が中心に描かれていることによる。『平家物語』では、非戦場の最期においては、概ね救済に関する記事が見られるが、戦場のそれにおいては少なく、『保元物語』『平治物語』よりも武士としての死の論理が強く出ている。『太平記』では、『平家物語』よりもさらに救済に関する記事が少なくなる。それは、『太平記』が欣求浄土的な死の論理よりも、武士としての死の論理を中心に最期を描いているためである。

3、最期譚の記述の方法

次に、各軍記物語ごとにその記述の方法について考察を加え、その特徴を明らかにしていく。

(1) 『保元物語』『平治物語』について

『保元物語』『平治物語』では、最期をともにする人物と最期における救済については、古態本から後出本へと『平家物語』が描く方向に近づいている。しかし、最期を遂げる方法について見れば、南北朝時代前後の改変が考えられる。

それは、成立後しばらくは、『平家物語』に影響を受けて増補改変するが、南北朝時代前後にまたその時代の影響を受け、部分的な改変を遂げていったためである。

(2) 『平家物語』について

『平家物語』では、同じ内容を繰り返し用いながら、それらを巧みに取捨選択しその組み合わせを変えることやその内容に微妙な変化をつけることによって、最期譚のバリエーションを作り出している。そして、それによってそれぞれの最期譚に独自性を持たせている。その要因として、『平家物語』の最期譚が、他の話との関連性が薄く独立していることや最期譚における重点のかけ方、また編纂に携わった人物の影響などがあげられる。

(3) 『太平記』について

『太平記』の最期譚では、身分に応じた最期が描かれている。それには、『太平記』の最期譚が、他の話と緊密な関係を有していることやそこに描かれる武士団の構成などが関係している。

4、最期譚成立の背景

次に、軍記物語の最期譚に見られる特徴の背景について見ていくことにする。

(1) 浄土信仰から律宗・時宗・禅宗へ

『保元物語』『平治物語』『平家物語』の最期譚には、念仏や後世を弔う記事が多い。それは、中古以来の功德主義的浄土信仰がその背景にあるためである。それに対して、『太平記』の最期譚には、念仏や後世を弔う記事が少ない。それは、『太平記』が成立した時代には、新仏教が社会に根を下ろしていたためである。

(2) 鎮魂から戦功記録へ

『保元物語』『平治物語』『平家物語』の最期譚は、一人の人物に焦点を当てて描かれている。それには、主にその成立時に権勢をふるって

いた平家ゆかりの人物の影響が考えられる。そのため、その最期譚には、鎮魂という色彩が色濃く出ている。一方、『太平記』では、一人一人がクローズアップされて描かれることなく、集団として最期を迎えることが多い。それには、『太平記』の編纂に携わった武士や律宗僧の影響が考えられる。特に、室町幕府主導による編纂のために、そこには戦功記録的な色彩が色濃く出ている。

(3) 貴族社会から武家社会へ

軍記物語の最期の記事は、凄惨な死の様子を描くか否かで大きく分けられる。『保元物語』『平治物語』『平家物語』は、そのような凄惨な死の様子をほとんど描かないのに対して、『太平記』『義経記』『曾我物語』は、それを多く描いている。その要因として、仏教思想上の問題やそのもとになる話の現場性の問題、それらの成立した社会の問題があげられる。そして、そのような差異は、軍記物語の成立の中心となる世界が貴族社会から武家社会へ移動するという変化の中で生じている。

5、終わりに

各軍記物語の最期譚は、それぞれの成立事情によって、その描き方が大きく異なっている。しかし、どの軍記物語も最期譚を重視して描いていることでは、同じである。それは、軍記物語における最期譚が、ただ死という事実の報告ではなく、死を描くことによってその人物の生を凝縮して描くからであろう。そのような最期譚は、室町時代以降の軍記物語でも綿々と描き続けられている。今後、室町時代や戦国時代まで時代を広げて、通史的に軍記物語における最期譚を研究していきたい。

主任指導教官 前田 貞昭
指導教官 山口 眞琴

平成一三年度
兵庫教育大学大学院学位論文

軍記物語における最期譚の研究

教科・領域教育専攻
言語系（国語）コース
M00122K
高尾 和範

目次

序章	軍記物語における最期譚	1
第一章	最期譚における死の記述	
第一節	最期を遂げる方法	2
第二節	最期をともにする人物	9
第三節	最期における救済	16
第二章	最期譚の記述の方法	
第一節	諸本で揺れる最期譚	22
第二節	パターン化された最期譚	32
第三節	身分によって差別化された最期譚	44
第三章	最期譚成立の背景	
第一節	浄土信仰から律宗・時宗・禅宗へ	51
第二節	鎮魂から戦功記録へ	60
第三節	貴族社会から武家社会へ	68
終章	中世における最期譚の位置	76

付記

参考文献

序章 軍記物語における最期譚

合戦を中心に語っていく軍記物語において、武将たちの最期というものが一つの見せ場になっていることは言うまでもない。それは、軍記物語に「最期」という章段名が多数存在することから明らかであろう。

この最期の話についての研究は少なくないが、その多くはいくつかの話だけを個別的に取り上げて論ずるものであった。一つの軍記物語、もしくはいくつかの軍記物語の最期譚に焦点を当てて考察しているものはほとんどない。その中で、崔文正氏は、『平家物語』『太平記』全体の死の様相について、それぞれ論じており(注1・2)、注目に値するが、崔氏の場合も最期譚という観点からではなく、その死の様相を分類し論じる内容になっている。

そこで、本稿は、『保元物語』『平治物語』『平家物語』『太平記』という鎌倉から南北朝時代を代表する軍記物語を、最期を語る話(最期譚)という観点から、私見を述べてみたいと思っている。ここで言う最期譚とは、合戦における武将の最期を指し、合戦時以外の自害や斬首などは基本的に取り上げないことにした。ただし、論の展開において必要な場合には、合戦時以外の最期等まで見ていくことにする。

まず、第一章では、最期譚の内容の中心である最期を遂げる方法、最期をともしする人物、最期における救済という三つの点に着目し、それぞれの軍記物語における差異を明らかにしていく。次に、第二章においては、第一章で明らかにされる軍記物語の差異をもとにして、それぞれの軍記物語に考察を加え、その特徴を明らかにしていく。さらに、第三章では、第一章・第二章で見出す軍記物語の特徴の背景について、それぞれの時代における宗教や社会状況などに焦点を当て考察していくことにする。

なお、本稿では、特に断らない限り、すべて日本古典文学大系(岩波書店)をテキストに用いた。また、軍記物語諸本の異同を調べるためには、以下のものを用いた。『保元物語』『平治物語』は、半井本(注3)・金刀比羅宮蔵本(注4、以下、金刀本)、『平家物語』は、延慶本(注5)・長門本(注6)・『源平盛衰記』(注7)・屋代本

(注8)・覚一本(注9)、『太平記』は、神宮徴古館本(注10)・水府明德会彰考館蔵天正本(注11)以下、天正本)、慶長八年古活字本(注12)以下、古活字本)である。本稿における引用文は、すべて現行の新字体によっている。また、引用中の傍線や中略は特に断らない限り引用者によるものである。

第一章 最期譚における死の記述

第一節 最期を遂げる方法

各軍記物語における最期を遂げる方法について見ていく。

『保元物語』の場合、戦闘時における最期は藤原頼長のみである。その頼長は、戦闘において誰が射たのかわからない矢(注13)にあたり、その傷がもとで逃亡中に非業の死を遂げることになる。それ以外の人物は、戦闘時には最期を遂げておらず、源為義のようにほとんどが、捕縛後の斬首となっており、『保元物語』においては、戦闘に参加した人物の自害は一例もない(注14)のである。『平治物語』の場合も、最期譚の中心人物の自害はほとんどない(注15)。敗軍の中心人物の一人である源義朝は、逃亡中に味方に裏切られて殺されるが、源義平をはじめとしてそれ以外の人物の多くは、『保元物語』と同じように捕縛後に斬首されるか、近親者の手にかかって死んでいる。『平家物語』では、討死が多い。しかし、『保元物語』『平治物語』では、ほとんどみられなかった自害も、多少見られるようになる。さらに、その自害の方法を詳しく見ると、焼死、切腹、入水など多種多様であり、何か一つの方法に固定していない。それに対して、『太平記』では、討死よりも自害の方が多い。さらに、その自害の方法について詳しく見ると、切腹という方法が多い。

それでは、このような軍記物語における最期を遂げる方法の違いは、なぜ生じているのであろうか。

最期譚の用例が少ないために、はつきりとしたことは言えないが、『保元物語』における武将は、戦闘に敗れて

窮地に陥っても深く自害をするなどということはまったく考えなかったようである。そのことは、保元の乱に敗れ、息子の義朝を頼って投降するものの、義朝にだまされて殺されることになった為義の言葉からうかがえる。

義朝はだしぬきけるよな。あはれ八郎が能いひつる物を。かく有べしと知たらば、六人の子共前後にたて、矢種のあらん限射尽て、討死して失たらば、名を後代にあげてまし。（巻中「為義最後の事」）

ここで、為義は、傍線部のように、捕まつて殺されるくらいなら、討ち死にすればよかつたと言っている。この言葉からすると、為義は討死が武士としての価値ある死に方と考えているようである。また、ここでは自害という言葉すら出ていない。したがって、為義は追い込まれた状況においても、自害することはまったく考えなかったのではないだろうか。

同じようなことは、『平治物語』についても言える。源朝長は、敗軍の将である父義朝とともに逃避行を続け、義朝の命にしたがつて一人信濃に下ろうとするが、傷のために下向できなくなり、わざわざ父のもとに引き返して首を打たれている（巻中「義朝奥波賀に落ち著く事」）。下向する以前ならともかく、途中からわざわざ引き返し、父義朝に首を打たせていることからすると、自害という選択肢が意識されていなかったのではないかと思われる。このようなことは、朝長だけではなく、鎌田正清に預けられていた義朝の娘の場合にもあてはまる。義朝は、鎌田に命じて自分の娘を殺させる（巻中「義朝敗北の事」）のだが、娘は義朝の命を鎌田から聞く前に、「あはれ我を害して、父御前の見参に入よかし」と言つて首をのべている。これらの例から、『平治物語』においては、自害をするということが意識になかつたか、あるいは忌避されることとして認識されていたのであろう。

また、この二人に共通することは、首を打たせる前に念仏を唱えていることである。朝長の場合には、義朝がその前に念仏を唱えるように命じ、鎌田に預けておいた娘は自分で念仏を唱え、ともに首を打たれている。このことから、この二人は臨終正念にて往生を遂げようとしていたのではないかと考えられる。

このことを裏付ける資料として、『古事談』の「巻第四勇士」にある「由井七郎臨終事」の話がある。

鎌倉二テ。庄司次郎。稲毛入道ナド被打之時。稲毛之舎弟。ユ井ノ七郎ト云者。遠景入道之許ニ出来云。已被結惡縁。不可免其難。雖須自害。年來有往生極樂之望。自害ハ臨終之正念之妨恨不如本意。又伝聞被刎頸之者不往生云々。依之御房ノミコソ令哀憐給ハメトテ。所參向也。可然者。向西方合掌。唱念仏之間。可差殺云々。遠景隨喜悲泣。申事由。浜二將行テ差之處。十二刀マデ一切念仏声不休。于時止念仏云。猶可死之心地モセヌ也。心サキヲ可差トテ又高声念仏之間。如云心崎ヲ被差之時。止声氣絶了。

鎌倉幕府の討手から逃れることが出来ないと判断した由井七郎は、遠景入道に自分の殺害を依頼する。それは、由井に「往生極樂之望」があり、自害は、傍線部にあるように「臨終之正念」を妨げ、極樂往生を遂げられなくなる恐れがあるからである。そして、由井七郎は朝長たちと同じように念仏を唱えるなど臨終行儀を行う中で死んでいる。この由井七郎と同じように、朝長たちも自害ではなく、近親者に首を打たせることによって、臨終正念を貫こうとしたのではなかるうか。それならば、朝長がわざわざ引き返し、父に首を打たせようとしたのも納得がいく。父義朝も、その朝長の気持ちを探して念仏を唱えるように言ったのであろう。

ただし、由井七郎の話は、元久三（一二〇五）年の出来事であり、平治の乱（一一五九）とはかなり時間的に隔たっている。しかし、『平治物語』成立時期（鎌倉時代前期）より以前であることを考えれば、『平治物語』の成立の場においても、このような考え方があってもおかしくない。

このように、『保元物語』『平治物語』においては、臨終正念を保ち、極樂往生を遂げようという考えがあつたためか、追い詰められた状況においても自害をする例が見当たらない。これは、念仏などの功德を積むことや臨終行儀を正しく行うことよつて往生が遂げられるという中古以来の浄土信仰の影響と考えられる。

しかし、このように『保元物語』『平治物語』では、忌避されていた自害が『太平記』では急増している。それでは、『太平記』において自害が増加しているのはなぜであろうか。

『太平記』の最期譚を見ていくと、敗北が決定的となった場合、早々と自害することを決めて実行している場

合が多い。例えば、

人手二懸リテ尸ヲ曝サンヨリハトテ、当国ノ一宮へ参リ、八歳ニ成ケル最愛ノ子ト、二十七ニ成ケル年来ノ女房トヲ刺殺テ、社壇ニ火ヲカケ、己ガ身モ腹搔切テ、一族若党二十三人皆灰燼ト成テ失ニケリ。

(巻第三「桜山四郎入道自害事」)

のように、味方が数十人も残っているにもかかわらず、みな様に切腹している。このような例は、『太平記』において枚挙に暇がない。これは、先にあげた為義のあくまで戦おうという姿勢とは対照的である。

では、このように自害する目的はどこにあるだろうか。それは、傍線部のように、敵の手にかかって死ぬのを潔しとしなかったからである。このことは、『平治物語』において近親者の手によつて首を打たれる理由と同じである。それでは、『太平記』において、近親者による殺害ではなく、自害に及ぶのはなぜであろうか。

それには、まず信仰の問題が深く関わっていると考えられる。『保元物語』『平治物語』においては、臨終正念を貫いての往生がかたく信じられていたが、『太平記』においては臨終正念を貫く必要性が希薄になったためではないだろうか。このことに関しては、第三章第一節に詳しく述べるが、律宗・時宗などの従軍僧の活躍や中古以来の浄土信仰から絶対他力による浄土信仰への変化が関係していると考えられる。

もう一つは、武士としての面目の問題が関わっていると考えられる。『保元物語』においては、あくまで戦うことが、武士の面目と考えられていたようである。そのことは、次にあげる『今昔物語集』における武士の姿からもうかがうことができる。

余五、此レヲ聞テ云ク、「(中略)一日ニテモ尊達ニ目ヲ見セムズレバ、極タル恥也。然レバ我レ露許命ヲ不惜マ。尊達ハ後ニ軍ヲ儲テ可戦也、我ニ於テハ、只一人彼レガ家ニ向テ、焼殺ヌト思ハムニ、此クモ有ケリト見ヘテ、一度ノ箭ヲ射懸テ死」ト思也。乃至子孫マテ此レハ極テ恥ニハ非ズヤ。後ニ軍ヲ發シテ討タラムハ、極テ弊カリナム。命惜カラム尊達不可来、我レ一人ハ行ナム」ト云テ、只出立ニ出デ立ツ。

右では、藤原諸任の夜襲を受けて命からがら逃れた平維茂(余五)が、態勢を整えてから後日攻撃を仕掛けたほうがよいと進言する郎等に対して、勝算などよりも武士としての面目のために、死をかけて戦おうとしている。

それに対して、『太平記』における武士は、自害、その中でも切腹に高い価値を認めているようである。例えば、次にあげる新田義顕・一宮の最期譚においては、

一宮何ヨリモ御快氣ニ打笑セ給テ、「(中略)抑自害ヲバ如何様ニシタルガヨキ物ゾ。」ト被仰ケレバ、義顕感涙ヲ押ヘテ、「加様ニ仕ル者ニテ候。」ト申モハテズ、刀ヲ抜テ逆手ニ取直シ、左ノ脇ニ突立テ、右ノ小脇ノアバラ骨二三枚懸テ搔破リ、其刀ヲ抜テ宮ノ御前ニ差置テ、

とあるように、一宮に自害の方法を尋ねられた新田義顕は、自害の見本として自ら切腹して果てている。また、村上義光の最期においても、義光は、大塔宮の身代わりとして、

只今自害スル有様見置テ、汝等ガ武運忽ニ尽テ、腹ヲキランズル時ノ手本ニセヨ。(巻第七「吉野城軍事」)と言つて切腹している。これらのことから、切腹が自害の中でも価値ある死に方とされていたことがわかる。

このことは、『太平記』だけではなく、同じく南北朝時代前後に成立した『義経記』の中にも、

「又自害は如何様にしたるをよきと云やらん」との給へば、「佐藤兵衛が京にて仕りたるをこそ、後まで人々讃め候へ」と申ければ、「仔細なし。さては疵の口のひろきこそよからめ」とて、(巻第八「判官御自害の事」)とあり、「佐藤兵衛が京にて仕りたる」(切腹)を価値ある死に方としている。さらに、室町時代初期の地誌である『峰相記』(注16)にも、「武士ナラハ腹切力党」という記述が見え、南北朝時代から室町時代初期に共通した価値観ということが言える。

それでは、数ある自害の中でも、なぜ切腹が価値ある死に方とされてきたのだろうか。それには、鎌倉時代後期から室町時代まで流行していた「ばさら」という現象が影響していると思われる。この「ばさら」について、

横島真弥氏は、「「ばさら」は自らの意志によってなされる行為であると同時に、それを見ている観客の存在を意識したものだとし、特に佐々木道誉などの「ばさら大名」を例にあげて、彼らの「意識と行動の目的は、公家社会や旧い権威を徹底して否定し、己の実力を誇示することにあつた。そしてその目的はまた、常に目に見える形、つまり物や姿で表されなければならなかつた」と述べている。そして、その具象化の例として、派手な格好や無体な振る舞いや暴言などをあげている（注17）。

横島氏は、武將の最期に關しては何も述べていないが、先にあげた『義経記』の「さては疵の口のひろきこそよからめ」という義経の言葉には、自害を単なる死に至る手段として考えるのではなく、明らかに他者の目を意識し、華々しく死のうとしていることがうかがえる。同じようなことは、『太平記』の最期譚でもうかがえる。

去程二高重走廻テ、「早々御自害候へ。高重先ヲ仕テ、手本二見セ進セ候ハン。」ト云俣ニ、胴計残タル鎧脱テ抛ステ、御前ニ有ケル盃ヲ以テ、舍弟ノ新右衛門ニ酌ヲ取セ、三度傾テ、撰津刑部太夫入道々準ガ前ニ置き、「思指申ゾ。是ヲ肴ニシ給へ。」トテ左ノ小脇ニ刀ヲ突立テ、右ノ傍腹マデ切目長ク搔破テ、中ナル腸手縷出シテ道準ガ前ニゾ伏タリケル。

（巻第十「高時并一門以下於東勝寺自害事」）

「是ヲ肴ニシ給へ」という言葉からもわかるように、長崎次郎高重は明らかに他者の目を意識し、かつ「右ノ傍腹マデ切目長ク搔破テ、中ナル腸手縷出シテ」とあるように、華々しく見せて死んでいるのである。以上のことから、『太平記』をはじめとして南北朝時代の最期譚に切腹が多く見られるのも、この「ばさら」の流行が関与しているためと思われる。他者に見せることを前提に考えた場合、一番華々しく見えるのは切腹であり、入水や焼身などでは、死の様子が他者の目に触れにくく、また首などを突く方法も、死までの時間があまりに短いために、切腹のように腸をつかみ出すなどの派手な行動がとれないからであろう。つまり、窮地に立たされた武士にとって、切腹という自害方法が、己という存在を他者に誇示できる唯一の方法だつたのではないだろうか。

それでは『平家物語』においては、どうであろうか。先にも述べたように、『平家物語』には、討死が多いもの

の、自害も多少見られる。しかし、『太平記』のように固定した自害の方法は見られない。また、『太平記』で見られるような切腹に対する価値も、『平家物語』においては認められない。そのことは、敵に迫られ窮地に立たされた平重衡が自害しようとする場面において明らかである。

三位中将、敵はちかづく、馬はよはし、海へうち入れ給ひたりけれども、そこしもとをあさにて、沈むべき様もなかりければ、馬よりおり、鎧のうは帯きり、たかひもはづし、物具脱ぎすて、腹をきらんとしたまふところに、
(巻第九「重衡生捕」)

重衡は、はじめは入水自殺をしようと思っているが、遠浅のため沈みきれない。そこで仕方なく切腹しようとするのである。つまり、重衡は切腹の方に特別な価値を置いてはいないのである。また、「木曾最期」においても、今井は木曾に自害をするように勧めるがその方法までは示しておらず、義仲がどの方法で死のうとしていたのかは不明である。しかも、自害を促した今井自身が自害をする手本として切腹ではなく、太刀を口にくわえて馬から飛び降りて自害しているのである。

次に、切腹という方法をとった源頼政について見てみよう。

三位入道は、渡辺長七唱めして、「わが預うて」との給ひければ、主のいけくびうたん事のかなしさに、涙をはらくとながいて、「仕ともおぼえ候はず。御自害候はば、其後こそ給はり候はめ」と申ければ、(中略)
太刀のさきを腹につきたて、うつぶさまにつらぬかてぞうせられける。
(巻第四「宮御最期」)

ここでも、最終的に切腹という方法をとるが、最初は自害をしようとも思っておらず、主人の首を打つことが恐びない従者の勧めにしたがって、自害している。しかも、自害の方法について、従者は何も言っていない。このことから、『平家物語』においては、追い詰められた武士の最期の方法については、自害と味方に首を打たせることを同等に考えていたことがわかり、『保元物語』『平治物語』と『太平記』の過渡的性格を有していると言える。以上、述べてきたことをまとめると、『保元物語』『平治物語』においては、追い詰められた状況においても、

武士が自害する例は見られない。それは、『保元物語』『平治物語』において、討死を武士としての価値ある死に方としていることと、臨終正念を保つために自害が忌避されていたことによると考えられる。『平家物語』では、自害も多少見られるが、その自害方法については固定しておらず、切腹に特別の価値を見出すことはできない。『太平記』では、自害、その中でも特に切腹が多い。それは、武士の死に方に対する価値観の変化と救済に対する考え方の変化が影響していると考えられる。その中でも、切腹の急増については、その当時流行していた「ばさら」の影響が考えられる。

第二節 最期をともにする人物

次に、最期譚において、その中心人物と最期をともにする人物について見ていきたい。

『保元物語』においては、頼長の最期譚を除けば、合戦における最期譚はない。しかも、その頼長の最期では、近臣たちが頼長の最期を看取るものの、ともに最期を遂げる人物はいない。そこで、捕縛後の斬首等まで見ていくことにすると、義朝の弟たちが斬首される場面（巻下「義朝幼少の弟悉く失はるる事」）で、その乳母がともに死んでいる。用例が少ないので、はっきりしたことは言えないが、『保元物語』においては、最期をともにする人物は、「乳母」などごく少数の人物に限られているようである。

『平治物語』では、義朝の最期に、義朝の乳母子鎌田兵衛正清をはじめとして、その側近たちがともに討死している（巻下「義朝内海下向の事付けたり忠致心替りの事」）。傾向としては、『保元物語』と同じように、最期をともにするのは、「乳母子」などのごく少数の人物に限られていると言えよう。

次に、『平家物語』『太平記』について見ていくことにする。次の二つの表（表1・2）は、『平家物語』『太平記』の最期譚における最期をともにした人物についての記述をまとめたものである。ただし、『太平記』の場合は、

その一部である。

(表1)

人物	最期をともした人物 (『平家物語』)
江大夫判官	子も父とともに切腹・焼死する。
源頼政	父を助けるために子が討たれる。
以仁王	宮を守る三井寺の僧兵たちが討死。乳母子は逃げ、憎まれる。
妹尾太郎兼康	子は、父から首を打たれる。郎等は生け捕りの後、死亡する。
木曾義仲	乳母子は、主人が打たれた後、太刀をくわえて自害する。
新中納言知盛	乳母子も主人とともに入水自殺する。

(表2)

人物	最期をともした人物 (『太平記』)
土岐十郎	岩党は討死する。
多治見四郎次郎	一族岩党二十余人が、刺し違えて自害する。
海東左近将監	子が討死する。
錦織判官代	子・岩党十二人切腹する。
桜山入道	妻子を刺し殺す。岩党二十三人主人と同じように切腹・焼死する。
越後守仲時	子以下四百三十二人切腹する。

この二つの表から、『平家物語』と『太平記』では、最期をともしする人物に大きな違いがあることが分かる。

まず、最期をとにもする人数の違いである。『平家物語』の場合、最期をとにもするのはほんの数名に限られている。しかし、『太平記』の場合、「越後守仲時自害」（巻第九）に代表されるように、大勢が自害もしくは討死をしている。もちろん、人数を誇張して書くのは『太平記』の常套かもしれないが、それを考慮に入れても『平家物語』と比べればかなり多いことがわかる。

次に、その人物について見てみると、「親子（父子）」というのは、両方に共通するものだが、それ以外では『平家物語』が、「乳母子」が多いのに対して、『太平記』では「若党」が多い。このことは、最期譚に限ったことではなく、『平家物語』や『太平記』などの作品全体についても言える。次の表（表3）は、軍記物語における「乳母」「若党」などの用例数を調べたものである。

（表3）

語句	『保元物語』	『平治物語』	『平家物語』	『太平記』	『義経記』
乳母	九例	五例	四十六例	七例	五例
乳母子	四例	五例	十一例	なし	三例
若党（共）	なし	なし	二例	七十例	七例
若者（共）	なし	四例	二例	五例	四例
若大衆（共）	なし	一例	三例	五例	七例
若殿原	なし	なし	一例	なし	なし
若兵	なし	なし	なし	三例	なし
若武者（共）	なし	なし	なし	十例	なし
若き奴原	なし	なし	なし	なし	一例

「若党」は、『太平記』では七十例も出てくるのに対し、『平家物語』ではわずかに二例しか登場してこない。しかも、『太平記』の場合は、「くが(の)若党」「一族若党」のように一族に準ずるような特定の集団を指すのに対して、『平家物語』の「若党」は、二例とも敵と対峙した指揮官が合戦を始める場合に用いられ、若い武者たちという不特定多数の意味で使われている。また、『保元物語』『平治物語』には、「若党」の用例自体がないが、『太平記』と成立時代が近い『義経記』には、七例も出てくる。ところが、「乳母子」について見ると、反対に『保元物語』『平治物語』『平家物語』に用例が多く、『太平記』『義経記』では用例が少ない。

まず、『保元物語』『平治物語』『平家物語』に多く出てくる「乳母(子)」について考えてみたい。『保元物語』や『平治物語』の最期譚では、「乳母(子)」が最期をともしにする例はない。しかし、合戦時以外について見れば、『保元物語』では、先の義朝の弟たちが斬首される場面で、その乳母たちが死をともしにしている。また、『平治物語』でも、殺される危険にさらされた左衛門督光頼の側には、乳母子の右馬允範能が控えている(巻上「光頼卿参内の事付けたり許由が事」)。さらに、最期をともしにしたかどうかは記述がないが、敗走する信頼には、敵に捕まるまで乳母子の式部大夫助吉が付き従っている(巻中「信頼降参の事並びに最後の事」)。以上のように、『保元物語』や『平治物語』では、乳母と主家の子、乳母兄弟の深い関係がうかがえる。

次に『平家物語』について見てみる。『平家物語』全体では、「乳母子」が十一例出てくる。具体的には、以仁王の乳母子の六条大夫宗信(二例)、八条院の乳母子の宰相殿(二例)、木曾義仲の乳母子の今井四郎兼平(二例)、平重衡の乳母子の後藤兵衛盛長(二例)、平宗盛の乳母子の飛驒三郎左衛門景経(二例)、平知盛の乳母子の伊賀平内左衛門家長(一例)である。このうち八条院の乳母子の宰相殿(二例)は、女性であり、最期譚との関連もみられないので、それ以外の九例について見てみることにする。

今井四郎兼平は、最後まで主人である義仲に付き従い、主人が討たれた後に、自分も自害して果てている(巻第九「木曾最期」)。また、飛驒三郎左衛門景経は、海に入った主人平宗盛を熊手でひきあげようとした伊勢三郎

義盛に対して、「我君とり奉るは何物ぞ」と言つて走りかかり、討たれている（巻第十一「能登殿最期」）。さらに、伊賀平内左衛門家長も、「いかに、約束はたがうまじきか」という主人知盛の言葉に、「子細にや及候」と答え、ともに手を取りくんで入水自殺を遂げている（巻第十一「内侍所都入」）。これらの乳母子の行動から、乳母子は主人と命運をともにする存在であったということがうかがえる。

それに対して、六条大夫宗信や後藤兵衛盛長は、ともに合戦中に、自分の命惜しさのために主人を見捨てて逃げている（巻第四「宮御最期」・巻第九「重衡生捕」）。しかし、両者とも後日そのことについて都の人間などから非難を受ける記事をとまなうことから、『平家物語』における「乳母子」は、主人と命運をともにするのが当然であり、主人の命が危ない場合には自分の命を捨てても主人を助ける存在として描かれている。

一方、主人の方は、飛騨三郎左衛門景経に対する宗盛の例のように、自分のために乳母子が討たれても、死をともにすることはなく、また宗盛はその後捕らえられて都に護送されるが、乳母子を見殺しにしたことに関しては何の非難も受けてはいない。主人の方は乳母子と命運をともにすることは多いが、自分の命を捨ててまで「乳母子」を守ることはなかったようである。

このような主人と乳母子の緊密な関係は、それ以外の武士たちには見られない。「忠度最期」（巻第九）などでも明らかのように、それ以外の武士は形勢不利と見るや主人のもとを離れており、そのことに対して、さして非難を浴びる記事もない。一般の武士は、主人と命運をともにするか否かはその個人の判断に委ねられており、乳母子のように必ず命運をともにしなければならないという強い倫理観はないようである。

米谷豊之祐氏は、清和源氏頼信流を中心に、武士団の成長と乳母の関係について論じている。その中で、特に十一世紀から十二世紀における東国武士団の成長には、「主家が乳母を介して股肱の郎従家を作っていく」過程がみられるとし、「武士における郎従は事あれば主と生死を共にしなければならぬ故に、その奉仕は全身的なものが要請される。そのためには郎従の母や妻の肉親的、没我的奉仕によつて裏うちされることこそ最も望ましい。乳

母は感情的に主の母であり、乳母子は主の兄弟である。かような紐帯によって結ばれた主従関係ほど緊密なものは他に無かろう」(注18)と述べている。

『保元物語』『平治物語』『平家物語』に描かれる時代は、まさに武士団の成長の時代であり、米谷氏が論じているような主家と乳母子の関係が尊ばれた時代だと考えられる。最期譚の中心人物の最期でさえ、現存する日記類には詳しく描かれていない。ましてやこのような乳母子たちについての記事は残っていないはずもなく、実際に最期をともしたのかどうかは確かめる術もない。しかし、実際に主人と最期をともししているかどうかは別にしても、そのような主家と乳母子の緊密な関係を尊ぶ風潮が『保元物語』『平治物語』『平家物語』に影響を及ぼし、最期をともしする人物として乳母子を多く登場させているのではないだろうか。

しかし、『保元物語』『平治物語』『平家物語』が成立した時代(鎌倉時代前期)について考えれば、このような武士団の成長はひとまず終わりを迎えていると言える。したがって、鎌倉幕府創設期までに比べて、主家と乳母の緊密な関係を尊ぶ風潮も減退していたと考えられる。米谷氏も、「武家における乳人も、鎌倉幕府の体制が固定するとともに、其の政治的・軍事的効用を著しく減殺し、原則的には十世紀以前の、家族内部の私的な存在に戻って行くのであった」(注18)と述べている。しかし、現実として主家と乳母子の緊密な主従関係が失われつつある時代であるがゆえに、逆に物語の中では懐古的に賛美されているのであろう。

さらに、『保元物語』『平治物語』『平家物語』の成立圏は都周辺と考えられ、都の貴族が関わっていることは間違いない。その貴族の社会においても、乳母(乳人・乳父など)を介して人間関係が形成されており、そして、その乳母がその社会で権勢をふるっていたことなどは、秋山喜代子氏(注19)・吉海直人氏(注20)などによって明らかにされている。また、日下力氏(注21)の指摘しているように、『保元物語』『平治物語』『平家物語』成立時に平家のゆかりの人物が天皇などの乳母として権勢をふるっていたということになると、それらの軍記物語に主家と乳母子の関係が特にクローズアップされて描かれていても不思議はなからう。

次に、『太平記』や『義経記』に多く出てくる「若党」について見てみよう。

『太平記』でも、最期をともしにする人物として親子（父子）が多く登場しているのは、『平家物語』と共通しているが、『平家物語』に多く見られた「乳母子」が『太平記』においては一例も見られない。その代わり、最期をともしにする人物として頻繁に出てくるのが、この「若党」と呼ばれる存在である。「一族若党二十三人皆灰燼ト成テ失ニケリ」（巻第三「桜山四郎入道自害事」）などの記述から明らかのように「若党」というのは、数十人で構成されていることがわかる。その人数の多さや身分的にそれほど高くないためか、『平家物語』における乳母子のように具体的な名前をほとんど記されることはなく、「若党」という集団として登場してくる。

中門ノ方ヲ見レバ、宿直シケル者ヨト覚テ、物具・太刀・々、枕ニ取散シ、高艸力キテ寝入タリ。（中略）土

岐十郎久ク戦テハ、中々生捕レントヤ思ケン、本ノ寝所ヘ走帰テ、腹十文字ニカキ切テ、北枕ニコソ臥タリケレ。中間ニ寝タリケル若党ドモ、思々ニ討死シテ、遁ル、者一人モ無リケリ。（巻第一「頼員回忠事」）

また、右のように、不意の敵襲にもかかわらず、若党は主人の近くにいます。このことから、「若党」は常に主人のそばに仕えて寝起きをともしし、主人の命を守る存在であったと考えられる。

この「若党」について、『国史大辞典』（注22）では、「武士の従者の一種。『平家物語』にもみえるが、南北朝時代前後から広く使われ、本来は老党に対する若者の寄合の意であったともいわれる。早くには郎等など比較的上級の従者の家の若者で構成され、主人に近侍し合戦の場において最後まで行動をともしする若党が多く資料にみえており、「譜代の若党」などの語も使われている。若さと譜代性が戦場の活躍を支えたと考えられ、その点では幕府制度における近習小侍に比せられよう」とある。

以上のことから、南北朝時代前後において「若党」は、「乳母子」と同じような働きをしていたのではないかと考えられる。つまり、主家と郎等を結束させる手段としての役割を担っていたのである。先述したように十一世紀から十二世紀までの武士団の成長には、乳母を介した擬似親子兄弟関係の網の目を築くことによって、生死を

ともにする強固な武士団を形成していったのに対して、南北朝時代前後では、郎等の子弟を主家が自分の近習として組織し、寝起きを共にするなど生活を共にしていくことよって、強固な武士団を作り上げていったと考えられる。それは、『太平記』に登場する主な武将たちの多くが独自の若党を形成していることなどからもわかる。この若党の出身者がいずれ主家の重要な武士となり、またその子弟を主家の若党に送り込むことで譜代の家臣を作り上げていったのである。南北朝時代は、戦乱の絶えない時代である。そのため、この若党制度によって、各武将たちは自分の武士団を成長させていこうとしていたに違いない。『太平記』は、このような時代に成立し、このような若党制度を背景としているために、最期をともにする人物として「若党」が多く登場しているのだと考えられる。また、『太平記』の成立圏も、都ではあるが、『難太平記』等の記事によれば、その成立に武士が深く関係していたことがわかる。そのため、この武士の制度がそのまま作品の中に描かれることになったのである。

今まで述べてきたことをまとめると、『保元物語』『平治物語』『平家物語』の場合、生死をともにする者は、家族もしくはそれに非常に近い乳母子に限られ、たとえ従者といえどもそれ以外の人物が生死をともにすることは少ない。それは、『保元物語』『平治物語』『平家物語』に描かれる時代、もしくはそれらが成立した時代に、乳母を紐帯として武士団が成長していったことが背景にあると考えられる。

ところが、『太平記』の成立した時代になると、最期をともにする人物が乳母子から若党へと変化していることがわかる。それは、乳母にかわって若党が武士団を成長させる紐帯の役割を担っていたためと考えられる。

第三節 最期における救済

『保元物語』の場合、合戦時における最期自体が少ないために、合戦時においては、いわゆる救済に関わる記

述（自ら念仏を唱えるなどの欣求浄土的な行動や死後供養など）を見出せないが、捕縛後の斬首等について見れば、悪左府頼長や崇徳院などを除いて、ほとんど救済に関する記述がある。このことから、『保元物語』は、後代怨霊として恐れられる悪左府頼長や崇徳院などの人物とそれ以外の人物を、救済に関する記述の有無によって書き分けているのではないかと考えられる。

崇徳院に関しては、西行の和歌による鎮魂の記述はあるものの、配流地において写経させるなどの功德を積み、いったんは救済を施すような記述をするが、都の政権にその写経の受け取りをあえて拒否させる（巻下「新院御経沈め事付けたり崩御の事」）ことによって、その怨霊となる必然性を強めようとしていると考えられる。

また、悪左府頼長の場合も、逃亡途中で父忠実に庇護を願い出るものの、それを忠実に拒否させ、そのまま死に至らせている（巻中「左府御最期付けたり大相国御歎きの事」）。頼長も崇徳院と同様に、最期に残された一縷の望みを拒否されることによって、怨霊となる必然性を増しているのである。そのことは、両者が救済の手段を拒否された時に、舌をかみ切るという同じ行動に出ている点からもわかる。その死後、崇徳院という追号がなされ、故頼長にも正一位太政大臣を贈られている（注23）が、そのことは、『保元物語』が成立した鎌倉時代前期には、既に悪左府頼長や崇徳院を怨霊として恐れるということが社会に浸透していたことを示している。そのため、このような書き分けがなされたのではないだろうか。つまり、『保元物語』では、基本的に救済に関する叙述をするのだが、怨霊として造形しようとする悪左府頼長や崇徳院に限っては、意図的に救済に関する叙述を施さなかったのである。

次に『平治物語』について見てみる。『平治物語』も『保元物語』と同様に合戦時の用例は少ないので、最期全般について見ると、義朝のように不意をつかれて殺される人物を除いて、多くの人物が、その最期において念仏を唱えるなどの行動をとっている。その中には、敗北してからも一人執拗に清盛の命を狙う悪源太義平もいる。義平は、首を斬ろうとする難波三郎恒房に対して「たゞ今こそくいつかずとも、百日が中にかつちとなつて、

汝をけころさむずるものを」と、呪うような言葉をかけており（巻下「悪源太誅せらるる事」、その後本当に雷となつて難波三郎恒房を殺すという記事がある。『平治物語』では、そのような人物にさえも念仏を唱えさせ、救済しようとしているのである。これは、『保元物語』には見られなかったことである。その原因として、義平が、崇徳院や頼長のように、怨霊として恐れられる存在としてはそれほど社会に浸透していなかったことが考えられる。そのことは、崇徳院や頼長のように、死後贈位贈官が行われていないことからわかる。

以上のことから、『平治物語』においても、『保元物語』と同じように、基本的にほとんどの人物に救済に関する記事が載せていると言える。ただし、『保元物語』にあつたような、救済の記事の有無による人物の書き分けという方法は認められない。それは、意図的にそうにしたのではなく、『保元物語』と『平治物語』に登場してくる人物像の違いから、生じてくるものと考えられる。

次に、『平家物語』の最期譚における救済について見ていくことにする。崔文正氏によれば、『平家物語』は、戦場と非戦場という空間を基準にして死の様相が描き分けられ、「戦場では武勇と結末の精神の様相が、非戦場では臨終正念と死後供養の様相が丹念に描かれ、何れも肯定的に捉えられている」（注一）という。また、例外として、源頼政や平忠度は戦場において念仏を唱えるなどの欣求浄土的な行動をとっているが、それも肯定的に捉えられていると指摘している。

確かに、非戦場における死について見ていけば、崔氏が述べているように、臨終正念と死後供養の様相が丹念に描かれており、伝統的な欣求浄土的な死の論理によって描かれていると言えよう。しかし、戦場死について見てみると、崔氏が例外として指摘している源頼政や平忠度の最期以外にも、欣求浄土的な死の論理によって描かれていると考えられる記述がある。例えば、一の谷合戦において、敦盛を切らざるを得ない状況に立たされた熊谷直実が、「たすけまいらせんとは存候へ共、御方の軍兵雲霞の如く候。よものがれさせ給はじ。人手にかけまいらせんより、同くは直実が手にかけてまいらせて、後の御孝養をこそ仕候はめ」と言つて、敦盛に対して死後供養

を誓っている（巻第九「敦盛最期」）。この場合、死後供養がなされたのが、実際の戦闘の場ではないが、その約束は戦場でしている。これも欣求浄土的な死の論理によって描かれていると言えるのではなからうか。

また、屋島の合戦においては、主人義経の身代わりとなって敵の矢に当たり、瀕死の状態にある嗣信のために、義経は、僧を探して一日経を書かせて弔らせている（巻第十一「嗣信最期」）。これは、まさに戦場において行われており、本人以外の者による供養ではあるが、同じように欣求浄土的な死の論理によって描かれている。

以上のことから考えると、『平家物語』では、戦場という場においても、「殆どの武士達が武勇と名分だけに徹して、宗教的な面を無視しながら死していく」（注1）とは、言えないのではないだろうか。戦場においても救済に関する記事があることから、戦場という場における死については、そのような武家の論理と宗教的な論理によって描き分けられているのではないかと考えられる。

そこで、『平家物語』の最期譚の中から、いわゆる救済に関する記述がある人物とそうでない人物について見ていくことにする。救済に関する記述がある人物は、源頼政、忠度、敦盛、嗣信などであり、それに対して救済に関する記述がない人物は、斎藤実盛、妹尾太郎兼康、木曾義仲、平教経、平知盛などである。これらの人物を見ていくと、ある特徴的なことに気がつく。それは、救済に関する記述がある人物は、『平家物語』の中で武勇に秀でていない人物として造形されているか、武勇以外にその人物を特徴付けるものを持った人物として造形され、救済に関する記述がない人物は、武勇に秀でた人物として造形されているということである。

確かに、源頼政や平忠度は武勇に秀でた人物としても造形されている。頼政は、鶴を退治する話（巻第四「鶴」）などがあり、忠度も「熊野そだちの大ぢから」（巻第九「忠度最期」）という記述がある。しかし、頼政については、「神輿振」（巻第一）において山門の強訴を武勇によって退けるのではなく、言葉巧みにかわしたり、最終的には、以仁王の乱によって敗死するというマイナスの要素も描かれている。また、忠度についても、富士川の戦い（巻第五「富士川」）や俱利迦羅峠の戦い（巻第七「俱利迦羅落」）など、平氏として大敗を喫する戦いに將軍

として従軍しており、連戦連勝する平教経・知盛たちとは対照的である。さらに、この二人には、歌人という特徴があつて、ともに最期譚において、その和歌が出されている。敦盛に関しては、武人として無名であるが、笛の名手という特徴を持ち、最期譚にもその笛が出されている。ただし、嗣信に関しては、その特徴付けるものも武勇に関する記述も『平家物語』の中には見当たらない。しかし、『平家物語』の最期譚の中で嗣信の最期に関する記事だけ、『吾妻鏡』の中にも美談として取り上げられており(注²⁴)、また諸本においても異同が激しいので、流伝経路の問題も絡んでいると言えそうである。

さらに、非戦時における最期(被斬や入水等)について見てみると、崔氏の指摘どおり、そのほとんどの人物に、念仏を唱えるなどの欣求浄土的な行動を見ることが出来る。そのような人物としては、平宗盛、平重衡、平維盛、平清経、平資盛などがおり、すべて武勇に秀でた人物としては、造形されていない。このように、『平家物語』において最期を遂げる人物を、救済に関する記事の有無によって、戦場非戦場に関わらず分類してみると、明らかに武勇という要素によって描き分けられているようである。

佐々木紀一氏は、小松の公達の最期を追っていく中で、墨俣合戦など平家軍が勝利を収める戦いの将軍が史実としては重衡や維盛であるが、屋代本・覚一本ではいずれも知盛と改められていることから、優れた武将としての知盛と平家も没落と悲劇の象徴としての維盛という人物像の徹底化が、一門の大將軍の交名でなされている(注²⁵)ことを指摘している。先に述べた最期譚の救済に関する記述の有無も、佐々木氏の指摘と同じように、『平家物語』における人物像の徹底化の一環として機能しているのではなからうか。

次に、『太平記』における救済の記事について考えてみる。崔氏は、『太平記』の死の記述に関して、「後生善所のためには欣求浄土的な最期の一念が必要だという前提の上で、戦場では武勇、非戦場では最期の一念が要求されてきて、場による論理は『平家物語』だけでなく『太平記』にも継承されている」(注²⁶)と述べている。

しかし、『太平記』の場合、桜山四郎入道の最期のように、念仏を唱えたりする暇も与えないうちに集団で自害

する例がほとんどであり、救済に関する記述を有する最期譚の割合が、『平家物語』に比べて少ない。しかも、救済に関する記事の有無によって人物を分類しても、それらに共通する要素は見当たらず、『太平記』は『平家物語』のように、救済に関する記事の有無によって人物造形をはかっているとは考えられない。以上のことから考えると、『太平記』は、「殆どの武士達が武勇と名分だけに徹して、宗教的な面を無視しながら死していく」（注1）傾向にあると言える。

そのことは、『太平記』の主要人物の一人である楠兄弟の最期からもうかがえる。正季の言葉の「七生マデ只同ジ人間ニ生レテ、朝敵ヲ滅サバヤトコソ存候へ」（巻第十六「正成兄弟討死事」）からわかるように、楠兄弟は、その最期において欣求浄土を自ら拒否している。しかし、『太平記』ではそのことに関して、何も非難はしていない。さらに、同じ場面において、楠正成の一族・従者たちの念仏を唱えながら死んでいくという対照的な姿を提示することによって、楠兄弟の欣求浄土拒否の姿勢がより強調されている。このことから、『太平記』においては、欣求浄土的な論理よりも武家の論理が優先されて描かれているということがわかる。

このような欣求浄土を拒否する姿勢は、『平家物語』の清盛の最期（巻第六「入道死去」）にも見える。清盛も、後世供養を拒否し、あくまで敵（頼朝）を滅ぼすことを願うという点において、この楠兄弟の最期と非常に似かよっている。しかし、『平家物語』と『太平記』との描き方の違いによって、前者は非難を受け、後者は非難を受けないという違いが生じている。

また、『太平記』には、楠兄弟と同じように、最期において欣求浄土を拒否する結城入道の話もあるが、その話で結城判官は墮地獄の罪を受けている。しかし、この結城判官の場合には、楠兄弟のように純粋に武家の論理を通すために欣求浄土を拒否するのではなく、次にあげるように、

ゲニモ此道忠ガ平生ノ振舞ヲキケバ、十悪五逆重障過極ノ悪人也。鹿ヲカリ鷹ヲ使フ事ハ、セメテ世俗ノ態ナレバ言フニタラズ。咎ナキ者ヲ毆チ縛リ、僧尼ヲ殺ス事数ヲ知ズ。常ニ死人ノ顔ヲ目ニ見ネバ、心地ノ蒙

気スルトテ、僧俗男女ヲ云ズ、日毎二三人ガ首ヲ切テ、態目ノ前ニ懸サセケリ。サレバ彼ガ暫モ居タルア
タリハ、死骨満テ屠所ノ如ク、尸骸積デ九原ノ如シ。
(卷第二十「結城入道墮地獄事」)

武士という立場を越えての殺生という要素が加わるため、墮地獄という結果を招来しているのだと考えられる。

今まで述べてきたことをまとめると、『保元物語』『平治物語』においては、最期においては基本的に救済に関する記述があることが多い。このことは、『保元物語』『平治物語』が武士としての死の論理よりも、欣求浄土的な死の論理を中心に描いていることによる。また、『保元物語』においては、救済に関する記事の有無によって、怨霊となる人物とそうでない人物とを造形する手段として用いられている。

『平家物語』では、非戦場においては救済に関する記事がほとんどあるが、戦場においては、少なくなっており、『保元物語』『平治物語』よりも武士としての死の論理が強く出ている。また、『平家物語』においては、この救済に関する記事の有無は、武勇に秀でている人物とそうでない人物を造形する手段として用いられている。

『太平記』においては、『平家物語』よりもさらに救済に関する記事が少なくなる。それは、『太平記』が欣求浄土的な死の論理よりも、武士としての死の論理を中心に最期を描いているためと考えられる。そのことは、楠兄弟の最期のように、欣求浄土を拒否することを肯定する叙述からもうかがえる。

第二章 最期譚の記述の方法

第一節 諸本で揺れる最期譚

『平家物語』『太平記』の最期譚を諸本で比べてみると、最期譚全体の繁簡や記事自体の出入りはあるものの、第一章で見てきたような、最期を遂げる方法、最期をともにする人物、最期における救済という最期譚の中心をなす内容についての異同はほとんどない。

しかし、『保元物語』『平治物語』の最期譚を見ていくと、そのような最期譚の中心をなす内容においても、かなりの異同を確認することができる。そこで、『保元物語』『平治物語』それぞれについて、最期を遂げる方法、最期をともしする人物及び最期における救済についてその異同を見ていき、その要因について考えてみたい。

まず、『保元物語』における最期を遂げる方法について見ていくことにする。次にあげたのは、半井本の為義の最期における為義の言葉である。

哀、八郎冠者ガ千度制シツル物ヲ。サリ共、子ナレバト憑テ来ケル事ヨ。カ、ルベシトダニ知タラバ、六人ノ子共弓手妻手ニ立、矢種ノ有ン限り射尽テ、矢種尽ヌル物ナラバ、自害ヲシタラバヨカルベキニ、犬死セ
ンズルゴザンナレ。

(巻下「為義最後ノ事」)

となっているが、金刀本では、

あはれ八郎が能いひつる物を。かく有べしと知たらば、六人の子共前後にたて、矢種のあらん限射尽て、討死して失たらば、名を後代にあげてまし。さては犬死せんずるにこそ。

(巻中「為義最後の事」)

となっている。子の義朝を頼って投降してきた為義は、この時義朝にだまされ殺されることを知る。そして、投降したことを後悔するのであるが、その中に傍線部のような最期を遂げる方法についての異同を見ることができ
る。この異同から、半井本の為義は、自害を価値ある死に方としているのに対し、金刀本の為義は、討死を価値ある死に方としてい
ることがわかる。

次に、為朝の最期について見てみよう。金刀本には為朝の流罪の記事はあるが、最期についての記事はない。しかし、半井本には、最期譚を含む後日譚の中で「家ニ火ヲサイテ、腹カキ切テゾ伏ニケル」(巻下「為朝鬼島ニ渡ル事并ビニ最後ノ事」とあり、為朝は敵に攻められ切腹して果てているのである。

これらのことから、半井本では、追い詰められた武士は、最期の方法として自害(切腹)を価値あるものとしているのに対し、金刀本では、あくまで抗戦し、討死を遂げるのが価値あるものとしていると言えよう。

しかし、話はもう少し複雑なのである。それは、先にあげた為義の言葉（「哀、八郎冠者ガ千度制シツル物ヲ」「あはれ八郎が能いひつる物を」からもわかるように、半井本・金刀本ともに為義の投降を引き止めたのは為朝（八郎）であり、その時為朝は、父為義に対して東国に下って最後まで抗戦することを主張している。半井本では、この為朝の進言と為義の自害すればよかつたという言葉とが齟齬をきたしている。また、この為朝の進言は、為朝の最期譚における潔い自害とも齟齬をきたしていることがわかる。つまり、半井本においては、この為朝の言動をめぐって、最期を遂げる方法に対する価値観が揺れているのである。

この為朝の最期譚のように、自分の妻子などを殺害し、その後自分も切腹し、放火するという話は、「桜山四郎入道自害」（巻第三）など『太平記』の最期譚には多く見られる。しかし、『平家物語』においては、切腹し放火するという話が江大夫判官の最期譚において見られるだけである。しかも、切腹という要素は、覚一本のみでその他の諸本には見られない。その他の諸本では、一様に放火による自害のみになっている。この江大夫判官の最期については、『玉葉』や『山槐記』に放火による自害という記事（注26）があることから史実に近いことと考えられる。恐らく覚一本以外は、それら記事やそれに類する風聞によって、この最期譚を作り上げているのであろう。覚一本のみが、放火の前に切腹という要素を加えているのは、覚一本の編纂時（南北朝時代）に、当時最期の方法として一般的になっていた切腹を加えたからではないかと考えられる。

以上のことから、半井本における為朝の最期譚は、後代（南北朝時代前後）に増補されたのか、もしくは討死などの形をとっていた原型を後代に改変していったという可能性が考えられる。日下力氏は、為朝後日譚（鬼島渡島及び最期譚）で使用される言葉に着目し、その言葉がその他の本文にも共通して用いられていることなどから、為朝後日譚が増補によるものではないとしている（注21）。日下氏の意見に従えば、記事全体の増補ではなく、その最期の部分のみ後代に改変されていったということになるだろう。

また、最期譚の中心人物ではないが、義朝の幼少の弟たちが斬首された後、その乳母（子）や格勤（主君の近

くにいて諸雜事に奉仕する身分の低い侍)が次々と後追い自殺する。その方法について、半井本では「腹力キ切テ伏ニケル。是ヲ見テ、残三人モ自害シツ。乙若殿ガ格勤一人、天王の格勤一人、其座ニテ六人死ニケリ」(巻下「義朝ノ幼少ノ弟悉ク失ハルル事」とあるのに対して、金刀本では「腹かき切てうち重てぞ臥てンげる。残る三人の乳母子共是をみて、誰かは劣べきとて、皆腹をぞ切てンげる。天王殿の格勤一人自害す。乙若殿格勤一人腹切てンげり」(巻下「義朝幼少の弟悉く失はるる事」とある。半井本では、最初の人物以外は、自害の方法について明確に示していないのに対して、金刀本では切腹を何回も示している。これは、半井本が記事を簡略に記しているだけとも考えられるが、金刀本がことさら切腹を強調しているようにも見える。武将と乳母(子)では、身分の違いによる差異があり、一様には論じられないのかもしれないが、金刀本では、この切腹を強調していることと先の為義の発言にみられる討死の重視の姿勢とが、齟齬をきたしていると考えられる。

以上のように、最期を遂げる方法という視点から『保元物語』を見れば、半井本・金刀本ともに全体を通して一つの価値観によって貫かれているとは言いがたい。これは、『保元物語』が、古態本とされる半井本から後出本とされる金刀本への単純な改変ではなく、幾度にもわたる複雑な増補・改変をしていった痕跡と言えるのではないだろうか。しかも、その増補・改変には、その内容から同時代に成立した『平家物語』だけではなく、『太平記』の成立した南北朝時代前後の影響も考えられそうである(注27)。

次に最期をともしする人物について見ていくことにする。自分の子の死を知った為義の北の方が入水自殺をする場面で、半井本は「乳母子ノ女房、衣ノ袖ニ取付テ、暫シ引ヘ放サザリケルガ、取付テコソ入ニケル」(巻下「為義ノ北ノ方身ヲ投ゲ給フ事」とあるが、金刀本では「めのとの女房、あな心うやとて、つゞきて河へぞ入にける」となっている。つまり、半井本では、この乳母子の女房は為義の北の方の自害を防ごうとして、結果的に巻き込まれて死んだのに対し、金刀本では、自らの意志で北の方に殉じている。この部分からは、半井本より金刀本の方に強い主従関係がうかがえる。また、それは、先にあげた義朝の弟たちが斬首される場面でも、その乳母子や

格勤たちが次々に殉死しているが、それも、半井本では一人にしか切腹と書かれなかったのに対して、金刀本では切腹と何人にも書かれていたことからもうかがえる。以上のことから、『保元物語』の最期をともにする人物について見た場合、半井本から金刀本へと主従関係がより強調されるように改変が進んでいると言えよう。

今度は、『保元物語』における救済について考えてみる。救済については、為義の最期の場面で、欺いて為義を殺害せよという義朝の命を受けた正清が、為義に義朝の言葉として語った内容に「義朝ハ無方代ニテ、石ノ中情トカヤノ様ニテ候ヘバ、アチキナク候。時ニ今ハ東国ヘ罷下テ、足柄山切塞テ、暫シ差テ、一期ハトテモカウテモ候ナン。正清ハ、入道殿ヲ具シ進テ、舟ニテ熊野地ヲ廻テ下候ヘ。義朝ハ海道ヲ罷下ベシ」(半井本巻下「為義最後ノ事」とあるが、金刀本では「人の口は悪き物にて候へば、いかなる讒言や出来候はんずらむ。東山なる所に菴室を構持て候。貴所にて候へば、彼に渡らせ給候て、御念仏候へかし。」(巻中「為義最後の事」となっている。ともに為義をだましていることには相違ないが、金刀本にだけ「念仏」が出てくる。また、義朝の弟たちが斬首される場面でも、半井本にはないが、金刀本には「西に向き念仏十返唱て、頸をのべてぞうたせける」(巻下「義朝幼少の弟悉く失はるる事」と「念仏」が出てくる。以上のことから、救済については、半井本より金刀本においてより強く描かれていると言える。

『保元物語』について、今まで述べてきたことをまとめると、最期をともにする人物及び最期における救済については、半井本から金刀本へと一貫した改変の流れを見ることができるとともにする人物は、「乳母」「乳母子」「格勤」などが中心であることは変わらないが、主人の死に殉ずるといふ姿勢をより強く表現するように改変が進んでいるように考えられる。この「乳母(子)」を介する武士の人間関係については、第一章第二節で述べたように、十一世紀から十二世紀にかけての武士団の成長に欠かせない要素であり、『平家物語』にはそれが、強く描かれている。『保元物語』『平治物語』『平家物語』は、相次いで成立しており、内容を見ても、相互に影響を及ぼしあっていたと考えられる。この『保元物語』における半井本から金刀本への改変の流れは、その『平家物

語』の影響を多分に受けていると考えられる。しかし、最期を遂げる方法においては、半井本から金刀本へという単純な改変とは言えず、その記事ごとに増補・改変を考えていかなければ説明ができない部分が含まれている。その中には、『平家物語』と傾向が類似するものではなく、『太平記』と傾向が類似しているものも多く含まれており、南北朝時代前後の増補・改変まで広く視野に入れて考えるべきであろう。

次に、『平治物語』について、最期を遂げる方法から見ていくことにする。信西の最期では、信頼・義朝の攻撃を予見して宇治に逃れた信西が、帝の身代わりとなって自害しようと穴に生き埋めになる。その時、半井本には「死ぬさきに、敵、たづねきたらば自害をせんずるに、刀をまいらせよ」という信西の言葉がある。また、実際に敵に見つかった時も「すなはち堀りてみれば、自害して被埋たる死骸あり」（巻上「信西の首実検の事付けたり南都落ちの事並びに最後の事」となっている。つまり、半井本では、信西は自害しているのである。ところが、金刀本では、半井本のようにもし敵に見つかったならば自害しようという信西の言葉はなく、その後実際に敵に見つかった時も「ほり起てみれば、いまだ目もはたらき息もかよひける」（巻上「信西の首実検の事付けたり大路を渡し獄門に梟けらるる事」とあるように、まだ生きており、敵に殺されることになる。信西の最期においては、半井本では自害とし、金刀本では殺害としているのである。

日下氏は、古態本『平治物語』においては、乱の首謀者である藤原信頼は逆臣として徹底化され、その犠牲になる信西は忠臣として峻別されるなど、朝廷に対する態度のいかんと規準として人物が書き分けられているが、後出本では、頼朝による源氏の再興を見越しての源氏中心の物語へと改変されている（注²⁸）と指摘している。先に上げた信西の描かれ方は、日下氏の指摘のように、古態本である半井本において威風堂々とした忠臣として描かれているのが、後出本である金刀本においては、それが少し弱められて書かれていることがわかる。また、『愚管抄』（第五）や『百鍊抄』（注²⁹）に信西が自害した記事があることから、半井本の記述の方が史実に近く、金刀本がそれを改変したということが考えられる。

しかし、陸奥六郎義高の最期譚においては、半井本では「義朝、目もあてられず涙を押さへ、上総介八郎に首とらせ、人にはもたせず手自提て、馬にのりて落ち行けるが、人にしらせじと、目・鼻・顔の皮をはぎけづりて、石を首に結そへて、谷川の淵に入てけり。」（巻中「義朝敗北の事」）とあるのに対して、金刀本では「義朝は義高のくびとらせ」（巻中「義朝敗北の事」）とだけあり、源氏の話でありながら、むしろ古態本である半井本において詳しく、後出本である金刀本では記事が簡略になっている。それは、おそらく、古態・後出とは言っても、半井本・金刀本ともに、独自に増補・改変を行っている部分を有しており、半井本から金刀本へという単純な関係ではないからであろう。したがって、この陸奥六郎義高の最期譚が、古態本である半井本において詳しく、後出本である金刀本では記事が簡略になっているのも、この最期譚が全体の大きな流れとは別に増補・改変をしているためではないかと考えられる。

また、この義高の最期譚において、注目されるのが、「人にしらせじと、目・鼻・顔の皮をはぎけづりて、石を首に結そへて、谷川の淵に入てけり」という表現である。敵に首を取られまいとするのは、どの軍記物語の武士においても、共通して見られる行動であるが、このように「目・鼻・顔の皮をはぎけづりて」というような徹底して首をとられまいとする行動は、『平家物語』においては見ることができない。『平家物語』においては、源頼政の最期のように、その首を床下などに隠す程度である。しかし、顔の皮をはぐなどの方法によって、徹底して首をとられまいとするのは、『太平記』においてはよく見られる。例えば、窮地に追い込まれ自害を迫られた大塔宮の言葉に、「吾己ニ自害セバ、面ノ皮ヲ剥耳鼻ヲ切テ、誰ガ首トモ見ヘヌ様ニシ成テ捨ベシ」（巻第五「大塔宮熊野落事」）というのがある。ここで大塔宮は、自分の皮をはぎ、耳や鼻をそぎ、誰の首かわからないようにするように従者に命じている。表現としても、義高の場合と非常に似かよっている。このような『太平記』の記事から考えると、この半井本における義高の最期譚は、原型として簡略な記事はあったものの、「目・鼻・顔の皮をはぎけづりて」という内容は、後代（南北朝時代前後）の改変によって加わってきたのではないだろうか。

次に義朝の逃亡中の記事について見ていきたい。半井本では、

頭殿、深雪の中にやすらはせ給ひて、「兵衛佐く」と仰られ候ひしか共、御いらへもなかりしかば、「あなむざんやな。早、さがりにけり。人にや生捕られやすらん」と、御涙はらくとおとさせ給ひ候し時、人々、袖をこそしほり候しか。

(巻中「金丸尾張より馳せ上り、義朝の最後を語る事」)

というように、一緒に逃亡していた頼朝の姿が見えなくなり、義朝以下の者たちが悲しみに暮れるという内容になっている。しかし、金刀本では、

頭殿、「いづくまでも頼朝をば身をはなたじとこそ思ひつるに、かしこにてもこゝにても頼朝にわかれぬることかなしけれ。敵にとらはれてきらるゝか、雪の中にて空しくなるか。生る事はよもあらじ。」と宣ふ。「義朝いきてなにかせむ。自害しておなじ道にゆかむ。」とて、すでにじがひせむとし給へば、悪源太・大夫進、「さ候はゝ、義平・朝長も御供つかまつり候はん。」とて、既自害せんとし給へば、

(巻中「義朝奥波賀に落ち著く事」)

というように、嫡子頼朝を見失った義朝以下の者たちは、悲歎のあまり自害をしようとするのである。

また、同じく義朝の逃亡中に、青墓の宿にて在地の者に落人として狙われ、佐渡式部大夫重成が義朝の身代わりとなって自害する場面があるが、半井本では、

佐渡式部大夫重成殿、「御命にかはりまいらせん」とて、頭殿の錦の御直垂をとつてめし、馬にひたとのらせ給ひて、宿より北の山ぎはへ馳せのぼり給ひしほどに、宿の人、追懸奉りしほどに、式部大夫殿、金作の太刀をぬいて、きやつばらを追つばらい、「をのれらが手には、かゝるまじきぞ。われをば誰とか思ふ、源氏の大將、左馬頭義朝」となのり、御自害候ぬ。

(巻中「金丸尾張より馳せ上り、義朝の最後を語る事」)

のように、自害についての方法や様子などの詳細な内容には触れていない。しかし、金刀本では、

佐渡式部大夫此由み給て、「こゝにはたゞ今重成かはりまいらせん。」とて、ある家にはしりいりて、馬を引

出し、うちのり、「左馬頭義朝おつるぞ。らうぜきなり。そのき候へ。」とて、雑人どもをけちらしておちられければ、宿の者ども申けるは、「源氏の大將軍、雑人にうしろをみせておちさせ給ふか。かへし給へ。」とて「こやすのもりにはせ入、おもてに」すゝむもの二三人射ころし、「義朝たゞいま自害するぞ。後に我が手にかけてりなど論ずるな。是をみよ。」とて、おもてのかはをさんく³⁰にけづりすて、腹十文字にかき切て、二十九と申に、重成空くなり給。御頸はとりたれ共、おもてのかはをけづりたれば、たれ共しらざれば、いたづらにすてにけり。

(巻中「義朝奥波賀に落ち著く事」)

のように、顔の皮を削つて、切腹したことを詳しく描いている。

頼朝を見失う話と義朝の身代わりとなつて佐渡式部大夫重成が自害する話は、ともに義朝の逃避行における話である。この義朝の逃避行の話は、半井本では、義朝の従者金王丸が、義朝の愛妾常葉に義朝の最期までの有様を語るといふ形をとつており、話の本筋として語られている金刀本とは、その形態を異にしている。そのため、半井本の方が金刀本より簡略に語られるのは当然ではあるが、二つの話に共通して死を遂げる方法の部分に異同が見られるといふのは、単にその形態の違いだけではなく、その流伝過程が問題になつてくるのではなからうか。

この半井本における金王丸の報告について日下氏は、物語の前後の叙述との間には、朝長の負傷記事の有無や頼朝の篠原における落後記事の有無などの矛盾する点を含んでおり、その報告談全体が未調整のまま作中に取り込まれたものである(注30)ことを指摘している。

また、先にあげた日下氏の指摘(注28)のように、金刀本が頼朝による源氏の再興を見越しての源氏中心の物語へとという方向性で改変されているために、先の頼朝を見失う話は、半井本より金刀本で詳しい叙述になつていると考えられるが、何回も自害という言葉を出して自害が強調されている点を考えると、少なくとも自害が定着してくる後代の改変と考えられる。しかし、そこに切腹などの具体的な自害方法が明示されていない点から、『太平記』の時代(南北朝時代前後)までは下らないのかもしれない。一方、佐渡式部大夫重成の話は、顔の皮を削

ることや切腹（「腹十文字にかき切て」という叙述があるので、陸奥六郎義高の最期と同じように、南北朝時代前後の改変ではないかと考えられる（注³1））。

最期をともしする人物については、『平治物語』の場合、ほとんど異同が見られないので、次に救済について見てみる。救済については、先ほどの信西が生き埋めになる場面で、金刀本では「息のかよはむ程は仏の御名をもとなへ参候ばやと思へば、」とあるが、半井本にはそのような記述がない。また、負傷して動けなくなった朝長を父の義朝が打つ場面で、金刀本では「さらばちかづき念仏申せ」「合掌して念仏を申されければ、」（巻中「義朝奥波賀に落ち著く事」というように二度も「念仏」という言葉が出てくるのに対して、半井本では一度も出てこない。また、義平が首を打たれる場面においても、金刀本では「西を拝て念仏申さん」「手を合せ念仏申されければ」（巻下「悪源太誅せらるること」とあるように、二度も「念仏」という言葉が出てくるが、半井本では一度も出てこない。さらに、志内六郎景住の最期においても、金刀本では念仏を唱えさせている（巻下「悪源太誅せらるること」）。以上のことから、『平治物語』においても『保元物語』同様に、半井本より金刀本の方が救済について強く描かれていると言える。

これまで『保元物語』『平治物語』の最期譚について、最期を遂げる方法、最期をともしする人物、最期における救済という記事の異同について考えてきたが、『保元物語』と『平治物語』は、最期をともしする人物と最期における救済については、古態本から後出本へと『平家物語』が描く方向（乳母子を中心とする主従関係の強調・念仏を中心とする救済）に近づいていると言える。しかし、最期を遂げる方法について見れば、むしろ古態本とされる半井本の方が、『太平記』の自害（切腹）という方向性を持っており、後代（南北朝時代前後）の改変を考える必要があるようである。もちろん、『平家物語』の成立した時代や南北朝時代前後の影響を受けて改変されたのではなく、もともと『保元物語』や『平治物語』がそのような特徴を有していたとも考えられる。しかし、『平家物語』や『太平記』が成立した時期に近い作品を見れば、『平家物語』や『太平記』と同じような特徴をそれぞ

これに有しているので、その二つの特徴を兼ね備えている『保元物語』『平治物語』がオリジナルとは考えにくい。それでは『保元物語』『平治物語』は、なぜこのような複雑な改変をしているのであろうか。

『保元物語』『平治物語』は『平家物語』と相次いで成立しているが、その成立後しばらくは、『平家物語』という大部な作品に影響を受けながら、『平家物語』に近づく方向で改変が進んでいったと考えられる。それが、半井本から金刀本への主な改変ではなかったのだろうか。そして、南北朝時代前後に『太平記』を生むような環境が成立し、その影響を半井本が強く受け、部分的な改変を遂げていったのではないだろうか。それに対し、『平家物語』は『太平記』と同じように大部な作品であり、『平家物語』としての独自の世界を完成させているために、南北朝時代前後の影響を受けにくかったと考えられる。

また、『保元物語』『平治物語』が、最期を遂げる方法においてのみ、南北朝時代前後の影響を強く受けているのは、最期譚の三つの中心的な内容のうちで最期を遂げる方法が一番改変しやすかったからではないだろうか。最期をともしする人物は戦闘の形態や武士団の組織など背景があり、また救済については信仰が深くかわつていするため、それを改変することはその時代に照らしあわせて考えると、荒唐無稽な話になってしまふ危険性を伴うからであろう。もちろん、『義経記』などは、その描かれる内容が『平家物語』とほとんど同時代でありながら、『太平記』の持つ特徴をたくさん有している。それは、『義経記』が南北朝時代前後に成立したからであろう。それに対して『保元物語』『平治物語』は、いったん『平家物語』と同じ時代に成立しているために、それほど改変できなかったのではないかと考えられる。

第二節 パターン化された最期譚

『平家物語』の最期譚を見ていくと、最期譚相互に非常によく似た内容がある事に気が付く。例えば、源頼政

の最期において、父頼政を助けるために子である源大夫判官兼綱が討たれるが、そのように父のために子が討たれるという展開は、平知章の最期においても見られる。また、敵の年齢が自分の子と同じくらいなので、その命を助けようとするという展開も、高橋判官長綱の最期と敦盛の最期において見られる。そのような類似した内容を『平家物語』の諸本ごとにまとめたものが次の表4である。丸数字がついているものは、二つ以上の最期譚において見られる内容を表している。

この表4を見ると、『平家物語』の最期譚には、非常に似通った内容がたくさんあることがわかる。しかも、類似した内容は、屋代本・覚一本という略本系諸本よりも、延慶本・長門本・源平盛衰記といった広本系諸本に顕著に見られる。そこで、このような類似した内容が、『平家物語』の最期譚の中でどのように機能しているか、類似した内容を多く持つ延慶本を取り上げ見ていくことにする。

次の表5は、延慶本の最期譚の類似した内容がどのように用いられているかを示したものである。ただし、類似した内容がない最期譚については、除外している。

この表から、類似した内容はたくさんあるものの、それぞれの最期譚では、それらのうちのいくらかを選択し用いることによって、その内容に変化を持たせていることがわかる。例えば、源頼政と工藤介の最期譚では、ともに「②自分の首を打たせようとするができないので切腹する」という内容が含まれるが、源頼政の場合には、「①父のために子が討たれる」という内容が加わり、また工藤介の場合には、「④太って動けない」という内容がそれに加わり、それぞれの独自性を生み出している。

ただし、斎藤実盛、薩摩守忠度、備中守師盛については、ともに「⑩名のらないで敵に討たれた後、名前がわかる」という内容のみで、話の展開が酷似している。しかし、最期譚を詳しく見てみると、討たれた後にそれぞれの名前が判明するものとなるものが、斎藤実盛の場合は「白髪」、薩摩守忠度の場合は「和歌」、備中守師盛は特に明示しない、というように区別されており、そのことによって差別化が図られている。同じようなことは、

(表4)

人物名	江大夫判官	源三位入道	以仁王	工藤介
延慶本	自宅に火を放ち焼死する。	①父のために子が討たれる。 辞世の歌を詠む。 ②自分の首を打たせようとすることができないので切腹する。その首を味方の者が取る。	敵の矢にて討たれる。従者は、主人の亡骸の側で切腹する。	④太って動けない。
長門本	自宅に火を放ち焼死する。	①父のために子が討たれる。 辞世の歌を詠む。 ②自分の首を打たせようとすることができないので切腹する。その首を味方の者が取る。 ③子も父の後に自害する。	敵の矢にて討たれる。従者も敵に討たれる。	④太って動けない。
源平盛衰記	自宅に火を放ち焼死する。	①父のために子が討たれる。 辞世の歌を詠む。 ②自分の首を打たせようとすることができないので切腹する。その首を味方の者が取る。	敵の矢にて討たれる。従者は、主人の亡骸の側で切腹する。	④太って動けない。
屋代本	(なし)	(欠巻)	(欠巻)	(なし)
寛一本	自宅に火を放ち、切腹し焼死する。	①父のために子が討たれる。 辞世の歌を詠む。 ②自分の首を打たせようとすることができないので切腹する。その首を味方の者が取る。	敵の矢にて討たれる。従者も敵に討たれる。	(なし)

齋藤実盛	高橋判官長綱	
⑩名のらないで敵に討たれた後、名前がわかる。	⑤ 大力の男 ⑥ 相手が自分の子と同じ年齢であることを知り、助ける。 ⑦ 敵の味方が近づく。 ⑧ 敵の味方に討たれる。	② 自分の首を打たせようとすることができないので切腹する。その首を味方の者が取る。
⑩名のらないで敵に討たれた後、名前がわかる。	⑤ 大力の男 ⑥ 腰の刀を落とす。 ⑦ 敵の味方が近づく。 ⑧ 敵の味方に討たれる。	② 自分の首を打たせようとすることができないので切腹する。その首を味方の者が取る。
⑩名のらないで敵に討たれた後、名前がわかる。	(討たれたことのみ)	② 自分の首を打たせようとすることができないので切腹する。その首を味方の者が取る。
⑩名のらないで敵に討たれた後、名前がわかる。	(討たれたことのみ)	(なし)
⑩名のらないで敵に討たれた後、名前がわかる。	⑤ 大力の男 ⑥ 相手が自分の子と同じ年齢であることを知り、助ける。 ⑧ すきを突かれて討たれる。	(なし)

木曾義仲	妹尾太郎兼康
<p>④ 太つて動けない子を見捨てる。 ① 従者は敵の前で太刀をくわえて自害する。</p>	<p>④ 太つて動けない子を見捨てる。 ③ 子も父と同様にして、切腹する。 ① 従者は敵の前で太刀をくわえて自害する。</p>
<p>④ 太つて動けない子を見捨てる。 ① 従者は敵の前で太刀をくわえて自害する。</p>	<p>④ 太つて動けない子を見捨てる。 ③ 子も父と同様にして、切腹する。 ① 従者は敵の前で太刀をくわえて自害する。</p>
<p>④ 太つて動けない子を見捨てる。 ① 従者は敵の前で太刀をくわえて自害する。</p>	<p>④ 太つて動けない子を見捨てる。 ③ 子も父と同様にして、切腹する。 ① 従者は敵の前で太刀をくわえて自害する。</p>
<p>(欠卷)</p>	<p>④ 太つて動けない子を見捨てる。 ① 従者は敵の前で太刀をくわえて自害する。</p>
<p>④ 太つて動けない子を見捨てる。 ① 従者は敵の前で太刀をくわえて自害する。</p>	<p>④ 太つて動けない子を見捨てる。 ③ 子も父と同様にして、切腹する。 ① 従者は敵の前で太刀をくわえて自害する。</p>

越中前司盛俊		薩摩守忠度	平知章
⑤ 大力の男 敵にだまされて、敵の命を助ける。	⑦ 敵の味方が近づくと。 ⑧ すきを突かれて討たれる。	⑩ 名のらないで敵に討たれた後、名前がわかる。	① 父のために子が討たれる。 子の敵を従者が取る。従者は傷を負って切腹する。
⑤ 大力の男 敵にだまされて、敵の命を助ける。	⑦ 敵の味方が近づくと。 ⑧ すきを突かれて討たれる。	⑩ 名のらないで敵に討たれた後、名前がわかる。	① 父のために子が討たれる。 子の敵を従者が取る。従者は傷を負って切腹する。
⑤ 大力の男 敵にだまされて、敵の命を助ける。	⑦ 敵の味方が近づくと。 ⑧ すきを突かれて討たれる。	⑩ 名のらないで敵に討たれた後、名前がわかる。	① 父のために子が討たれる。 子の敵を従者が取る。従者は傷を負って切腹する。
(欠巻)		(欠巻)	(欠巻)
⑤ 大力の男 敵の言葉にのらず、首を討とうとする。相手が降人になるといので助ける。 ⑦ 敵の味方が近づくと。 ⑧ すきを突かれて討たれる。		⑩ 名のらないで敵に討たれた後、名前がわかる。	① 父のために子が討たれる。 子の敵を従者が取る。従者は傷を負って切腹する。

大夫業盛	敵と組み合い、井戸の中に落ちる。 ⑦ 敵の味方が近づく。 ⑨ 敵の味方に討たれる。	(なし)	切腹の後、敵に首を討たれる。	敵と組み合い、井戸の中に落ちる。 ⑦ 敵の味方が近づく。 ⑨ 敵の味方に討たれる。	(欠巻)	(討たれたことのみ)
但馬守経正	(なし)	(なし)	主人の身代わりとなつて射られる。	(なし)	(欠巻)	(討たれたことのみ)
佐藤嗣信	主人の身代わりとなつて射られる。	主人の身代わりとなつて射られる。	主人の身代わりとなつて射られる。	主人の身代わりとなつて射られる。	主人の身代わりとなつて射られる。	主人の身代わりとなつて射られる。
能登守教経	敵二人を抱いて入水する。	敵二人を抱いて入水する。	敵二人を抱いて入水する。	敵二人を抱いて入水する。	敵二人を抱いて入水する。	敵二人を抱いて入水する。
新中納言知盛	従者と共に入水する。	教盛と従者と共に入水する。	従者と共に自害する。	従者と共に入水する。	従者と共に入水する。	従者と共に入水する。

(表5)

人物名	源頼政	工藤介	高橋判官長綱	斎藤実盛	妹尾太郎兼康	木曾義仲	越中前司盛俊	薩摩守忠度	平知章	平敦盛	備中守師盛	大夫業盛
①	○								○			
②	○	○										
③					○							
④		○			○							
⑤			○				○					
⑥			○							○		
⑦			○				○			○		○
⑧							○					
⑨			○									○
⑩				○				○			○	
⑪						○						

「④太つて動けない」という内容についても言える。工藤介の最期譚と妹尾太郎兼康の最期譚では、「④太つて動けない」という内容においては共通しているが、その当事者が、前者の場合には、父であるのに対して、後者の

場合には、子となっており、このような微妙な変化によって、それぞれの最期譚の独自性を生み出している。

この類似した記事を諸本間で比較すると、先に述べたように略本系よりも広本系において顕著に見られることがわかる。例えば、延慶本などの広本において妹尾太郎兼康と木曾義仲の最期譚を比較すると、「①従者は敵の前で太刀をくわえて自害する」という内容が共通する。しかも、

郎等宗俊モ敵アマタ討トリテ、シカ木ノ上ヨリ、「妹尾殿ノ郎等ニ宗俊ト云、カウノ者ノ自害スル、見ヨヤ」ト云テ、大刀ノキサキヲロニク、ミテ、マ逆ニ落テ、貫レテ死ニケリ。（延慶本第四「兼康与木曾合戦スル事」）
「日本第一ノ甲ノ者ノ主ノ御共ニ自害スル。八ヶ国ノ殿原、見習給へ」トテ、高キ所ニ打アガリ、大刀ヲ抜テ、キサキヲロニクワヘテ、馬ヨリ逆ニ落テ、ツラヌカレテゾ死ニケル。大刀ノキサキニ尺計後ヘゾイデニケル。
（延慶本第五本「義仲都落ル事付義仲被討事」）

のように、従者の言葉までも非常に似ていることがわかる。

ところが、覚一本では、木曾義仲の最期において「①従者は敵の前で太刀をくわえて自害する」という内容を残しているが、妹尾太郎兼康の最期では、それを「郎等モ共ニ自害シツ」というように、極めて簡略に記すに留めている。これは、『平家物語』全体の中で二つの最期譚が非常に近い位置にあるということやその細部まで非常に似通っているため、覚一本などの略本では、妹尾太郎兼康の「①従者は敵の前で太刀をくわえて自害する」という内容を「郎等モ共ニ自害シツ」と改変することによって、さらに二つの最期譚の差別化を図っているのではないかと考えられる（注32）。

このような略本の最期譚における差別化の傾向は、他の部分においても見られる。先に延慶本において非常に似ていると指摘した斎藤実盛、薩摩守忠度、備中守師盛の最期譚についても、名前を明かすものとなる「白髪」や「和歌」が登場する斎藤実盛・薩摩守忠度は、広本と同じような内容で最期譚を描いているものの、それを明示していない備中守師盛は、討たれたことをのみ記すに留めている。つまり、最期譚を精選することによって差

別化を徹底しているのである。これは、源頼政や妹尾太郎兼康の最期譚と類似した内容を多く有する工藤介の最期譚においても言える。つまり、工藤介の最期譚を削除することによって源頼政や妹尾太郎兼康の最期譚の独自性を際立たせているのである。もちろん、現存する広本系諸本から直接略本系諸本へと改変がなされているわけではない。しかし、最期譚におけるこのような類似した内容を見る限りにおいては、広本にあるような最期譚が最初に出来上がり、それを整理していくうちに略本のような最期譚が出来上がったと推測される。

このような広本と略本による最期譚の描き方の違いは、単に古態か後出かという問題ではなく、それぞれテキストに担わされたものが背景にあると考えられる。延慶本は、その奥書などから、根来寺をはじめとする寺院で管理され、唱導と深く関わっていたと考えられる。この点に関して小林美和氏は、広本の延慶本における澄憲をはじめとする安居院流唱導書の取り込みを指摘し、「歴史の普遍的な（真理）を唱導者流の語り口で物語ったところに、この物語の本質を求めるべきであろう」（注³³）と述べている。小林氏の指摘のように、その唱導のテキストとしての性格を備えていたとするならば、それぞれの最期譚においてもその独自性を追求するよりも、ある程度の独自性さえ持っていれば、むしろ定型化した内容の繰り返しによって構成されていた方が、享受者には理解されやすかったのではなからうか。

しかし、覚一本に代表される略本系諸本は、基本的には平曲のテキストとしての役割を担っている。したがって、平曲の語り方が、テキストにも反映しているはずである。兵藤裕己氏は、「一部平家」（平家全巻の通し語り）や「巻平家」（任意の一卷の通し語り）が中世に広く行われていた（注³⁴）ことを指摘している。もし、そのように語られたのなら、物語の後半部分に集中して存在する最期譚は、当然差別化がはかられるはずである。

以上のように、『平家物語』の最期譚には、諸本において程度の差はあるものの、同じ内容を繰り返し用いながら、それらを巧みに取捨選択してその組み合わせを変えることやその内容に微妙な変化をつけることによって、バリエーションを作り出し、それぞれの最期譚に独自性を持たせている。しかし、『保元物語』『平治物語』の最

期譚には、『平家物語』で見られるような最期譚相互における類似した内容を確認することはできない。それは、『保元物語』『平治物語』においては最期譚の数が少なく、そのようなバリエーションを作り出す必要性がなかったためだと考えられる。ところが、『平家物語』以上に最期譚を有する『太平記』においても、そのような特徴は見出せない。それでは、『太平記』において見られない類似した内容が、『平家物語』の最期譚においてだけ、なぜ用いられているのだろうか。

まず、『平家物語』と『太平記』の最期譚が、その全体の中でどのように描かれているかという問題が関係していると考えられる。『平家物語』の最期譚は、合戦の中に置かれているものの、その他の最期譚や合戦の話との関連性が薄く、それ自体で一つの話としてのまとまりを持っている。それに対して、『太平記』の方は、大きな合戦譚の一部分として、他の最期譚や合戦の話と深い関連性を持ち、緊密に結びついている。つまり、『平家物語』は、合戦譚よりも最期譚に比重が置かれ、『太平記』は最期譚よりも合戦譚に比重が置かれて描かれているのである。このような全体における最期譚の比重の違いがあるため、『太平記』においては、その関連する他の最期譚や合戦の話との組み合わせの中で、最期譚の独自性を作り出していくことができるが、『平家物語』の場合には、その一つの最期譚内部において独自性を作り出していくしかないのである。

次に考えられるのが、最期譚内部の構造の違いである。表5を見ると、類似した内容のほとんどが、死を遂げる方法やその様子に関する叙述ではなく、「④太って動けない」など最期に至るまでの過程についての叙述であることがわかる。『平家物語』の最期譚では、最期を遂げる方法やその様子についての叙述は少なく、最期に至るまでの過程の叙述が多い。それに対して、『太平記』の場合は、「差違へ北枕二臥ケレバ」「腹十文字二切給テ北枕二ゾ臥給フ」などのように最期を遂げる方法やその様子についての叙述が多く、最期に至るまでの過程についてはあまり記さない。そのため、『太平記』においては、最期を遂げる方法やその様子によって、最期譚の独自性を作り出すことができるが、『平家物語』の場合には、それができず、最期に至るまでの過程によって独自性を作り出

すしかないのである。そのような最期譚における重点のかけかたの違いは、それぞれの成立背景が深く関与しているのだが、それについては第三章で詳しく述べることにする。

さらに、成立圏の問題が関与している。これも第三章で詳しく論ずることにするが、『太平記』は書かれた内容と成立した時代が非常に近いことやその編纂に携わる人物が実際の戦闘に深く関与した人物のために、生々しい資料を収集しやすかったと考えられる。しかし、『平家物語』の場合は、その書かれている内容と成立した時代が離れており、またそれに携わった人物も実際の戦闘に従事するような人間ではないので、その資料も十分ではなく、かつその状況を想像するのも困難であったのではないだろうか。そういう環境のもと『平家物語』が成立したとすれば、定型化した内容の繰り返しという方法が用いられるのも当然だと考えられる。

第三節 身分によって差別化された最期譚

『太平記』には、皇族や執権のような貴族社会や武家社会におけるトップクラスの人間から若党や一介の武士に至るまで、さまざまな身分の人間の最期譚が描かれている。このような特徴は、最期譚の数が少ない『保元物語』『平治物語』はもちろんのこと、比較的³⁾最期譚の多い『平家物語』においても見られない。『平家物語』における最期譚の中心人物は、妹尾太郎兼康など若干の例外を除き、ほとんどが源平の血をひく武将であり、最期譚に描かれる人物の身分的な開きは『太平記』に比べると少ない。皇族としては、安徳天皇が壇ノ浦において入水するが、安徳天皇は幼少であり、戦闘に直接参加しているわけでもなく、また、祖母である二位尼に抱きかかえられての入水であり、自らの意志による死とは言いがたい。また、実際に戦闘に参加し、討死を遂げている以仁王がいるが、以仁王は、母の出自が高貴でないために親王宣下も得ていない。しかも、以仁王の謀反計画が発覚するや、朝廷では、以仁王の名前を源以光と改め、遠流に処すことが決定している（注³⁾）。つまり、臣籍に下

しているのである。また、謀反の鎮圧に対して、当時の日記類に「王化猶不墮地、逆賊遂被擒殺了」（注³⁶）、「宮並頼政法師已下党類伏誅」（注³⁷）と記されていることや、以仁王の首実檢に高倉上皇自ら立ち会っている（注³⁸）ことから、以仁王が王権を脅かす存在として認識されていたことがわかる。以上のようなことから考えると、『太平記』において登場する一宮などは、同列には扱えないであろう。

このようにさまざまな身分の人間の最期譚が描かれているのが、『太平記』の特徴と言えるのであるが、そこにはたださまざまな身分の人間の最期譚が描かれているだけではなく、それぞれの身分に応じた最期が描き分けられている。例えば、村上義光の最期では、

村上彦四郎義光（中略）、宮ノ御前ニ參テ申ケルハ、「（中略）恐アル事ニテ候ヘ共、メサレテ候錦ノ御鎧直垂ト、御物具トヲ下給テ、御諱ノ字ヲ犯シテ敵ヲ欺キ、御命ニ代リ進セ候ハン。」ト申ケレバ、宮、「争デカサル事アルベキ、死ナバー所ニテコソ兎モ角モナラメ。」ト仰ラレケルヲ、義光言バヲ荒ラカニシテ、「カ、ル浅猿キ御事ヤ候。（中略）是程ニ云甲斐ナキ御所存ニテ、天下ノ大事ヲ思食立ケル事コソウタテケレ。ハヤ其御物具ヲ脱セ給ヒ候ヘ。」ト申テ、（中略）「天照太神御子孫、神武天王ヨリ九十五代ノ帝、後醍醐天皇第二ノ皇子一品兵部卿親王尊仁、逆臣ノ為ニ亡サレ、恨ヲ泉下ニ報ゼン為ニ、只今自害スル有様見置テ、汝等ガ武運忽ニ尽テ、腹ヲキランズル時ノ手本ニセヨ。」ト云俣ニ、鎧ヲ脱デ櫓ヨリ下ヘ投落シ、錦ノ鎧直垂ノ袴許ニ、練貫ノ二小袖ヲ押膚脱デ、白ク清ゲナル膚ニ刀ヲツキ立テ、左ノ脇ヨリ右ノソバ腹マデ一文字ニ搔切テ、腸掴デ櫓ノ板ニナゲツケ、太刀ヲロニクワヘテ、ウツ伏ニ成テゾ臥タリケル。（巻第七「吉野城軍事」）

のように、窮地に立たされた主人大塔宮を逃がすために、大塔宮の鎧直垂を着て敵を欺いて自害している。このように主人の身代わりとなって討たれるのは、他にも高師直の身代わりとなった上山六郎左衛門などがある。切腹と討死という違いはあるが、この上山六郎左衛門も村上義光と同じように主人の鎧を着て自分が高師直だと偽って、最期を遂げている。また、身代わりでなくても、河村弾正のように窮地に立たされ自害しそうになった主

人を助け、かえって自分が討たれる場合などがある。それらは、従者としての立場を全うして最期を迎えていると言えよう。そして、そのような最期に対して、村上義光の場合は主人大塔宮が後世を弔うことを約束し、上山六郎左衛門の場合には「情ヲ感ズル上山八、師直ガ其命二代テ討死シケルゾ哀ナル」という叙述があり、河村弾正の場合には、主人の右衛門佐（山名師氏）が後世を弔っている。これらのことから、『太平記』では、そのように従者の立場を全うした人物の最期を好意的に描いていると言えよう。

このような従者としての最期は、『保元物語』にはなく、『平治物語』においても、佐渡式部大夫重成の最期譚にのみ見られる程度である。この佐渡式部大夫重成は、窮地に追い込まれた主人源義朝を逃がすために、身代わりになって自害している。この話は、村上義光や上山六郎左衛門の最期譚にかなり似ているが、諸本において、主人の鎧を着る描写の有無や自分の顔の皮を削るか否かにおいて異同が見られ、第二章第一節で述べたように後代（南北朝時代前後）における改変がなされているのではないかと考えられる。

『平家物語』では、乳母子や子が身代わりになることは多く見られるが、その他の従者が身代わりになることはほとんどない。確かに『平家物語』の「嗣信最期」において、嗣信は主人の義経の身代わりとなって能登守教経の矢に当たって死ぬのであるが、その時義経を守るために教経の矢先に立ちふさがった者は何人もおり、義経を狙った矢がたまたま嗣信に当たっただけである。したがって、村上義光のように主人の鎧を着て敵に自分が主人だと騙り身代わりとなって死ぬという話とは、かなり趣を異にしていると言えよう。

また、村上義光や上山六郎左衛門と同じように將軍の印である錦の直垂を着て最期を遂げるといふ展開は、斎藤別当実盛の最期譚（巻第七「実盛」）においても見られるが、これは主人を守るために着たのではなく、自分が故郷に錦を飾るために出陣前に願っていたものである。したがって、村上義光や上山六郎左衛門のように、敵に対して主人の名を騙ることもない。以上のことから、『保元物語』『平治物語』『平家物語』ではほとんど見られない、このような従者という立場を全うする最期譚は『太平記』の特徴であると言えよう。

次に、主人という立場についてはどのように描かれているかを見てみよう。先にあげた村上義光の最期譚において、村上義光は、「死ナバ一所ニテコソ兎毛角モナラメ」と言う大塔宮に対して、それは「云甲斐ナキ御所存」だとし、「天下ノ大事ヲ思食立ケル」人間の身の処し方ではないと諫言して、身代わりとなって最期を遂げている。この村上義光の諫言には、主人として望まれる生き方（死に方）がうかがわれる。このように、主人の早計な死を思い留まらせようとする従者は『太平記』の中に多く登場してくる。例えば、新田義貞の最期において、

義貞ノ方ニハ、射手ノ一人モナク、楯ノ一帖ヲモ持セザレバ、前ナル兵義貞ノ矢面ニ立塞テ、只的二成テゾ射ラレケル。中野藤内左衛門ハ義貞ニ目加シテ、「千鈞ノ弩ハ為饑鼠不発機。」ト申ケルヲ、義貞キ、モアヘズ、「失士独免ル、ハ非我意。」ト云テ、尚敵ノ中へ懸入ント、駿馬ニ一鞭ヲス、メラル。（中略）義貞弓手ノ足ヲシカレテ、起アガラントシ給フ処ニ、白羽ノ矢一筋、真向ノハツレ、眉間ノ真中ニゾ立タリケル。

（巻第二十「義貞自害事」）

のように、形成不利な状況に立たされた主人新田義貞に対して、傍線部のように中野藤内左衛門は引き退くように諫言する。この中野藤内左衛門の「千鈞ノ弩ハ為饑鼠不発機」という言葉には、明らかに主人としての身の処し方が示されている。しかし、義貞はその諫言を受け入れなかったために、敵に首をとられるという屈辱的な最期を迎えることになってしまうのである。『太平記』では「此人君ノ股肱トシテ、武将ノ位ニ備リシカバ、身ヲ慎ミ命ヲ全シテコソ、大儀ノ功ヲ致サルベカリシニ、自ラサシモナキ戦場ニ赴テ、匹夫ノ嫡ニ命ヲ止メシ事、運ノ極トハ云ナガラ、ウタテカリシ事共也」と、天皇の股肱の武将としての身の処し方を誤った義貞に、厳しい評価を下している。このように、『太平記』においては、その立場をわきまえた最期が望まれているのである。

しかし、『保元物語』『平治物語』『平家物語』では、従者が主人の死を思い留まらせようと諫言する例は、ほとんどなく、『平治物語』において一例見られる程度である。そこでは、敗戦後逃亡を続ける義朝が、その途中において嫡子である頼朝を見失い、悲観して自害しようとするのを、鎌田兵衛が、「佐殿一人をおしみたてまつり、御

自害候はず、二人の公達御自害候べし。いかでか二人の公達をばうしなひまいらせ給ふべき」(巻中「謀叛人流罪付けたり官軍除目の事並びに信西子息遠流の事」と宥めることによつて、義朝は自害を思い留まっている。この時、鎌田兵衛が義朝の自害を思い留まらせる理由には、義平をはじめとする公達たちの身の上が問題にされており、義朝という個人の立場(武士の棟梁)が問題にされているわけではない。『太平記』における村上義光や中野藤内左衛門の諫言の内容と比較すれば、その違いは明らかである。

次に、先の諫言とは反対に、どうしようもない状況に追い込まれ、主人に死を勧める例について考えてみよう。例えば、北条高時の最期においては、

去程二高重走廻テ、「早々御自害候へ。高重先ヲ仕テ、手本二見セ進セ候ハン。」ト云俣二、胴計残タル鎧脱
テ抛ステ、(中略)御前二有ケル盃ヲ以テ、舍弟ノ新右衛門ニ酌ヲ取セ、三度傾テ、撰津刑部太夫入道々々
ガ前二置キ、「思指申ゾ。是ヲ肴ニシ給へ。」トテ左ノ小脇二刀ヲ突立テ、右ノ傍腹マデ切目長ク搔破テ、中
ナル腸手縷出シテ道準ガ前ニゾ伏タリケル。(中略)長崎新右衛門今年十五ニ成ケルガ、(中略)其刀ニテ己
ガ腹ヲ搔切テ、祖父ヲ取テ引伏セテ、其上ニ重テゾ臥タリケル。此小冠者ニ義ヲ進メラレテ、相摸入道毛腹
切給へハ、

(巻第十「高時并一門以下於東勝寺自害事」)
のように、主人北条高時の切腹を勧めるために、長崎次郎高重をはじめとして従者が次々と切腹しているのである。そして、それに促されるように、主人である北条高時(相摸入道)も自害している。このように主人に自害を勧めるために従者が率先して自害する例は、大仏陸奥守貞直の最期をはじめとして枚挙に暇がない。

このような例は、『太平記』だけではなく、『平家物語』においても見られる。例えば、木曾義仲の最期において、主人義仲があくまで一所で死のうと主張するのに対して、今井四郎兼平は、

「弓矢とりは年来日來いかなる高名候へども、最後の時不覚しつればながき疵にて候也。御身はつかれさせ給て候。つゞくせいは候はず。敵にをしへだてられ、いふかひなき人郎等にくみおとされさせ給て、うたれ

させ給なば、「さばかり日本国にきこえさせ給ひつる木曾殿をば、それがしが郎等のうちたてまたる」など申さん事こそ口惜う候へ。たゞあの松原へいらせ給へ」

(巻第九「木曾最期」)

と答えて、自害を勧めている。一見すると、新田義貞に対する中野藤内左衛門の諫言の内容に似ているように思える。しかし、ここで注目して欲しいのは、今井の「弓矢とり」という言葉である。ここで、今井が「弓矢とり」(武士)という言葉を用いていることから考えると、今井は武士としての望ましい死に方を示しているのであつて、ことさら主人(武家の棟梁)として望ましい死に方を示しているのではないのである。もちろん、武士としての死に方を全うするというのは、武家の棟梁である義仲ならなおさらであるという今井の主人に対する思いがあるに違いない。現に今井が敵に向かって義仲の自害の時間を稼いでいるということ自体、今井と義仲の主従関係がなければ成り立たないことである。しかし、これを『太平記』における村上義光や中野藤内左衛門の諫言の内容と比べた場合、その違いは歴然としている。村上義光や中野藤内左衛門の言葉には、武士団などの大きな組織がその背後にうかがわれるのに対して、今井の言葉にはあくまで義仲との主従関係しかうかがうことができない。それは、木曾義仲の死後、今井四郎兼平が、

「是を見給へ、東国の殿原、日本一の甲の者の自害する手本」とて、太刀のさきを口に含み、馬よりさかさまにとび落、つらぬかてぞうせにける。

(巻第九「木曾最期」)

という行動に出ていることからもうかがえる。ここで、今井は、従者としての死に方ではなく、あくまで武士としての望ましい死に方を体现しているのである。

今度は、皇族の最期について考えてみる。次の例は一宮の最期の場面である。

新田越後守義顕ハ、一宮ノ御前ニ参テ、「合戦ノ様今ハ是マデト覚ヘ候。我等無力弓箭ノ名ヲ惜ム家ニテ候間、自害仕ランズルニテ候。上様ノ御事ハ、縦敵ノ中へ御出候共、失ヒ進スルマデノ事ハヨモ候ハジ。只加様ニテ御座有ベシトコソ存候へ。」ト被申ケレバ、一宮何ヨリモ御快氣ニ打笑セ給テ、「主上帝都へ還幸成シ時、

以我元首將トシ、以汝令為股肱臣。夫無股肱元首持事ヲ得ンヤ。サレバ吾命ヲ白刃ノ上ニ縮メテ、怨ヲ黃泉ノ下ニ酬ハント思也。抑自害ヲバ如何様ニシタルガヨキ物ゾ。」ト被仰ケレバ、（卷第十八「金崎城落事」）ここで新田義頭は、一宮に対して、自分は「弓箭ノ名ヲ惜ム家」であるために自害しようと思うが、皇族である一宮は、自害する必要がないことを言っている。この新田義頭の言葉には、武士と皇族との最期のあり方の違いが顕著にあらわれている。このように、窮地に追い込まれても自害を遂げないのが、皇族としての身の処し方であつたに違いない。しかし、一宮は、自分が「元首將」であることを理由に、義頭とともに自害することを主張している。つまり、一宮は、単なる皇族としてではなく、新田義頭以下の武士団を統率する者という立場を貫いて自害しようとしているのである。

『平家物語』において皇族が最期を遂げる例としては、以仁王の最期のみである。先述したように、以仁王は謀反発覚とともに臣籍降下されており、そのような立場が影響しているかもしれないが、『太平記』における一宮のように、他の従者が以仁王に対して皇族としての身分的配慮を示している部分もないし、またその最期の様子についても、他の武將とほとんど変わらない。以上のように、『太平記』では、一人の武將としての死に方よりも、集団における立場に応じた最期を描いている。それでは、『平家物語』では身分によって最期譚が書き分けられていないのに、『太平記』ではこのように身分によって、最期譚が書き分けられているのは、なぜであろうか。

その原因として、まず物語における最期譚の位置の問題が、関係していると思われる。このことに関しては、第三章第二節において詳しく論ずることにするが、『平家物語』の場合は、合戦譚よりも最期譚の方に比重が置かれて描かれているために、最期譚が比較的に独立して存在している。そのため、他の最期譚や合戦の話との関係性が薄く、その最期譚の中で話が完結している。言い換えれば、物語全体の中でその人物がどのような立場で描かれていようと、その話の中ではあくまで主人公として描かれており、物語全体における身分的な縛りから解放されているのである。それに対して、『太平記』の場合は、合戦譚の中の一部として最期譚が位置付けられており、

他の最期譚や合戦の話と緊密な関係を有している。つまり、最期譚といえども、全体の中における身分的な縛りから解放されることはないのである。

次に第一章第二節でも述べたように、『平家物語』と『太平記』に描かれる武士団の構成の違いが考えられる。『平家物語』に描かれる十一世紀から十二世紀にかけての武士団は、乳母を紐帯として成長させてきた。それに対して、『太平記』に描かれる鎌倉後期から南北朝時代にかけての武士団は、「若党」という言葉の頻出からもわかるように、武士団における明確な身分関係がその紐帯の役目を担ったのではないかと考えられる。そのため、主人は主人として、従者は従者としての立場を全うすることが望まれたのではないだろうか。しかも、『太平記』に描かれた時代は、打ち続く戦乱の中で、そのような秩序が失われていた時代であり、そうであるがゆえになおさらそのことが強調されて描かれているのであろう。

第三章 最期譚成立の背景

第一節 浄土信仰から律宗・時宗・禅宗へ

平安時代中期以降、末法思想の広がりとともに、浄土信仰が盛んになっていく。十世紀末から十二世紀初めに成立した往生伝（『日本往生極楽記』『続本朝往生伝』『拾遺往生伝』など）の成立には、そのような浄土信仰が色濃く反映している。実際に、『日本往生極楽記』の作者である慶滋保胤は「二十五三昧会」の中心人物として自ら極楽往生を实願しようと努めていた。それらの往生伝には、真摯に往生を願ひ、念仏等の功德を積もうとする人々の姿が多く描かれている。往生伝の作者や読者は、そのような往生を遂げた人物の伝記に触れることにより、その人物との結縁を願ったに違いない。このような往生譚は、往生伝以外にも『今昔物語集』『発心集』『古事談』などの説話集にも、多く載せられており、人々がいかに極楽往生を渴望していたかが推し量られる。

往生譚に描かれる人物の多くは、僧侶や貴族たちであり、武士が描かれることは少ない。その理由として、武士というものが、その職能のため、殺生などの仏の教えに背く行為を多く行わざるを得なかったことが考えられる。殺生を多く行うような武士は往生を遂げるはずがないと考えられたのであろう。これを裏付けるように『古事談』第四には、「懺悔之心」が無かった源義家の臨終に際して、その隣家の女房が、「無間地獄之罪人源義家」という札を掲げて地獄の鬼がやってきた夢を見たという話が載せられている。源義家は、前九年の役（一〇五一年）・後三年の役（一〇八三年）によつて後代の源氏の基礎を築いた人間であり、武士にとっては英雄的存在だったにもかかわらず、その殺戮行為のため地獄に落ちることになっていたのである。それとは対照的に、その父頼義は、武士として墮地獄の罪を作りながら、その罪業を強く意識したためか、晩年出家入道し、「建堂造仏」して功徳を積み、極楽往生したという話（『古事談』第四）が残っている。話の結末としては対照的だが、頼義も晩年出家入道し、「建堂造仏」して功徳を積んだことにより、往生を果たしているものであり、これらの話の前提として、武士としての行為は墮地獄にあたる重い罪業を負うという考え方があることには、変わりがない。『続本朝往生伝』にも、『古事談』とほぼ同じ内容の頼義の往生譚があるが、そこには「前伊予守源頼義朝臣は、累葉武勇の家に於て、一生殺生をもて業となせり」とあり、ここからも、武士はその職能ゆえに殺生にかかわらざるを得ず、そのため墮地獄のような深い罪業を負うことになるという認識が広く存在したことがうかがえる。

軍記物語の登場人物の多くは、武士である。武士であるがゆえに、先に述べたように深い罪業を負った存在として人々に認識されていたと考えられる。そのような意識は、軍記物語の中にも反映されている。例えば、『平家物語』巻第六の「入道死去」における二位殿（清盛の北の方）が見た清盛を迎えるために牛頭馬頭が無間地獄よりやってくる夢の話は、『古事談』における源義家の話と酷似しており、同じように清盛の生前の罪業を物語る話として位置付けられる。また、一の谷において生け捕りにされ鎌倉に護送されることになった平重衡は、「年ごろ契たりし聖」である「黒谷の法然房」に「情ら一生の化行をおもふに、罪業は須弥よりもたかく、善業は微塵は

かりも蓄へなし。かくてむなく命おはりなば、火穴湯の苦果、あへて疑なし」と言っている（巻第十「戒文」）。この重衡の場合は、南都の伽藍を焼くという罪業が話の中心になっているが、それも「就中に南都炎上の事、王命といひ、武命といひ、君につかへ、世にしたがふはうのがれがたくして、衆徒の悪行をしづめんがためにまかりむかて候し程に、不慮に伽藍の滅亡に及候し事、力及ばぬ次第にて候へども、時の大將軍にて候し上は、せめ一人に帰すとかや申候なれば、重衡一人が罪業にこそなり候ぬらめと覚え候」というように、自身が武士という存在であったがために犯さざるを得なかつた罪業と考えている。

『太平記』においても、「所縁ナリケル律僧」が見た殺戮の罪業を懺悔することなく死んだ結城入道が阿鼻地獄に落ちて鬼に責められる夢の話（巻第二十「結城入道墮地獄事」）がある。渡辺昭五氏は、この話を取り上げ、「特に武士たちの戦場における死の機会が多くなる中世では、殺生戒から墮地獄への危惧は、そこから救う地蔵菩薩をもてはやすようになる」と、武士の墮地獄への危惧と中世に広がった地蔵菩薩信仰とを関連させて述べている（注³⁹）。ただし、この話については、第一章で述べたように、武士として犯した殺生の罪よりも、結城入道が常日頃殺生を好んで行っていたことによる墮地獄が中心に描かれており、先にあげた源義家や平清盛の話とは、少しその趣を異にしている。しかし、鎌倉幕府の滅亡時に一人奮戦する長崎次郎高重の言葉の中にも、「哀罪ノ事⁴⁰ 夕二思ヒ候ハズハ、猶モ奴原ヲ浜面ヘ追出シテ、弓手・馬手ニ相付、車切・胴切・立破ニ仕棄度存候ツレ共、」（巻第十「長崎高重最期合戦事」とあり、武士としての行為が殺生の罪にあたるという意識がうかがえる。以上のことから、『平家物語』と『太平記』のどちらにも、武士としての行為が深い罪業を負うという意識が根底に横たわっていると考えられる。つまり、最期譚とは、そのような罪深き武士の生の終焉を描いたものなのである。

第一章第三節でも述べたように、『保元物語』『平治物語』のほとんどの最期譚（合戦時以外の最期を含む）には、救済に関する記事がある。しかし、『平家物語』においては、建礼門院の出家・往生による平家一族の救済という物語全体としての構想を別にして、個々の最期譚の事例を見ていくと、そのような救済を施される人物とそ

うでない人物に描き分けられている。このことの要因として、『平家物語』の人物像の徹底化ということが考えられる。しかし、それは逆に、その人物像の徹底化という制約のために、『平家物語』における救済の叙述が、意図的に減らされたとも考えられる。つまり、『保元物語』『平治物語』と『平家物語』における救済に対する考え方は本質的に同じであるのに、それを書く（語る）次元での違いによって、このような最期譚における救済の叙述の違いが生じてきたのであろう。

それに対して『太平記』における救済の叙述は、『保元物語』『平治物語』『平家物語』に比べて、割合として圧倒的に少ない。具体的に見れば、「桜山四郎入道」「人見四郎入道恩阿・本間九郎資貞」「村上義光」「北国探題淡河右京亮時治」「新田義顕・一宮」「武蔵五郎」「河村弾上」（一連の最期譚は「」でくくっている）の七つの最期譚においてしか確認できない。これは、『太平記』の分量から考えると、極端に少ない（最期譚の総数は、『平家物語』十八、『太平記』七十六）と言える。しかも、『平家物語』などの最期譚における救済のように詳しく念仏を唱える様子を描いたり、後世を弔う様子を描いたりしているものは少ない。『平家物語』の場合では、捕縛後の斬首や戦闘時以外の自害はもちろんのこと、時間的な制約をかなり受ける戦闘時においても、しばしば念仏を唱えさせている。それでは、このような違いはどうして生じているのだろうか。それを考えるために、最期譚における救済の方法を詳しく見ていくことにする。

最期譚における救済の方法としては、主なものとして最期譚の中心人物（死に逝く者）が、自分自身のために念仏を唱える方法と最期譚の中心人物の死後（死に瀕している場合もある）、その縁者がその故人のために後世を弔う方法がある。まず、前者について見ていくことにする。

西に向高声に念仏數十返唱て、手を合て待けるに、（中略）政清が郎等太刀をぬき、立てまかり出、しとゝつ。暗さはくらし、太刀のあて所少さがりたりければ、玉懸骨にぞ切付たる。入道みかへりて、「など政清は仕ぞ。」とて、いよく念仏高声に唱ける所を、次の太刀には打落す。（『保元物語』巻中「為義最後の事」）

悪源太、「あの雑人ども、のき候へ。西を拝て念仏申さん。」(中略)手を合せ念仏申されければ、難波うしろへまはるとぞみえし。御頸は前におちにけり。

(『平治物語』卷下「悪源太誅せらるる事」
今はかうとやおもはれけん、「しばしのけ、十念となへん」とて、六野太をつかうで弓だけばかりなげのけられたり。其後西にむかひ、高声に十念となへ、「光明遍照十方世界、念仏衆生撰取不捨」との給もはてねば、

(『平家物語』卷第九「忠度最期」)

右の例が示すように『保元物語』『平治物語』『平家物語』の最期譚では、念仏の記事をかなり詳しく描いている。ところが、『太平記』においては、このような最期譚の中心人物が、自ら念仏を唱えて、極楽往生を祈るという描写がほとんどない。唯一、念仏に関する描写が詳しいのは武蔵五郎の場合だけである。しかし、これは、捕縛後斬首される直前で、『平家物語』における忠度の例のように戦闘時における念仏というのは一例もない。

このように、『保元物語』『平治物語』『平家物語』と『太平記』の最期譚を比べると、念仏の扱いがかなり異なっている。『平家物語』などの場合、この最期譚が何の資料をもとにして描かれたか、わからない。現存する日記類を見る限り、最期譚に描かれる人物の最期に関する記事はほとんど見当たらない。あるにしても、名前が列記されているくらいで、『平家物語』などの最期譚にあるような詳しい内容を記しているものはほとんどない。もちろん、現存しないだけで、その当時には、その最期の様子を伝えた資料が残っていたという可能性もある。また、その様子をつぶさに見てきた人物が生き残っていた、もしくはその語った内容が口承されていたとも考えられる。しかし、これだけの最期譚のすべてについて克明な情報が得られていたとは考えられないし、また第二章第二節で見てきたように、『平家物語』の最期譚にパターン化された構造を見出すことができるならば、多くは創作の部分から成り立っていると考えた方がよいであろう。そうだとすれば、『平家物語』で念仏の様子が詳しく描かれるということは、それが救済の有効な方法として、その当時認識されていたことになる。

渡辺貞麿氏は、「燈爐之沙汰」「金渡」における平重盛を取り上げ、平安時代中期において藤原道長・頼通がな

したような莫大な財力を投入しての美的感覺的・功德主義的浄土教の立場を継承している（注4）と指摘している。つまり、道長や頼通が、法成寺無量寿院や平等院鳳凰堂を造営し、晚年念仏三昧の生活を送りながら、ひとえに極樂往生を願ったように、『平家物語』の重盛も東山に四十八間の御堂を建てたり（巻第三「燈爐之沙汰」）、中国の育王山に金を送り自分の後世を弔わせたり（巻第三「金渡」）して極樂往生を願っているのである。

さらに、渡辺氏は「戒文」（巻第十）における法然房源空の発言にも、表面上は源空の思想を捉えているようだが、源空の思想の根幹を成す弥陀の本願による絶対他力の部分が欠落しており、これは『平家物語』作者が源空の思想を真に理解していない（中古以来の浄土教から本質的に抜け出すことのできない）ことによるとしている。

法然房源空は、『平家物語』の成立期には存在し、かつ活動していたことは間違いない。しかし、その源空の思想が広く行き渡るまでには、かなりの時間が必要だったのではなからうか。そのことは、源空の孫弟子にあたる行仙が書いた『念仏往生伝』の存在からもうかがえる。先に述べたように、源空の思想は弥陀の本願による絶対他力による救済であり、中古以来の自力的な功德主義的浄土信仰とは、異質なものである。ところが、その功德主義的浄土信仰のもとで盛んに書かれた往生伝が、源空の孫弟子によって書かれているのである。つまり、『念仏往生伝』が書かれた一三世紀中頃においても、源空の思想は、そのままの形では広く行き渡らず、往生伝などの前代の遺物を用いることによってしか教化できない状況にあったということがわかる。

以上のことから、『平家物語』では、中古以来の功德主義的浄土信仰が綿々と続いているのであり、極樂浄土に往生しようとするれば、不断の努力を傾注して、行住坐臥を問わず念仏を行い、作善をつんでいかなければならぬのである。そう考えると、『平家物語』の最期譚において、念仏に対する描写が詳細に描かれているのも納得がいこう。つまり、「忠度最期」に見られるような西に向かって高声に念仏を唱える行為は、戦闘時における武士のせめてもの臨終行儀であり、それをさせる以外には最期を迎える武士を救済できないと考えたからなのである。

しかし、『太平記』の成立した時代には、源空以下の新しい浄土教の浸透によって、弥陀の本願による絶対他力

の救済が信じられるようになるのである。ここでは、『平家物語』に見られるような生前の作善の多寡によって救済が決定するような功德主義的なものではなく、弥陀の本願、それ自体への絶対的な帰依によってその救済がはかられるのである。そのため『太平記』では、『平家物語』のように最期譚に念仏の記事が詳しく描かれなくなったのではないかと考えられる。

次に最期譚における救済のもう一つの方法である中心人物の後世をその縁者が弔うことについて考えてみる。これも、念仏の場合と同じように、『保元物語』『平治物語』『平家物語』には多く描かれている。しかも、先にあげた『平家物語』の「嗣信最期」のように『保元物語』『平治物語』『平家物語』の最期譚には、後世を弔う様子が克明に描かれているものが多い。ところが、『太平記』では、後世を弔う描写が三例しかない。先にも述べたように、『太平記』の分量からすると、これは極端に少ないと言える。それらを詳しく見てみると、人見四郎入道恩阿や本間九郎資貞の最期では、従軍僧がその首をもらい受け供養している。村上義光の最期では、主人の大塔宮の身代わりとなって討たれる義光に対して大塔宮が後世を弔うことを約束するが、実際に後世を弔う記述はない。『太平記』において、後世を弔うことについての詳しい記述があるのは、河村弾正の最期譚（巻第三十二「神南合戦事」）だけである。ここでは、戦闘中に主人右衛門佐（山名師氏）の命を助けるために、河村弾正が討たれ、主人右衛門佐がその後世を弔っている。僧に自分の馬を与えることなど、話の内容が『平家物語』の「嗣信最期」に酷似しており、『平家物語』や『吾妻鏡』などを下敷きにして、書かれているのではないかと考えられる。そのため、『太平記』において河村弾正の最期譚だけが、このように後世を弔う記事が詳しいのであろう。

以上見てきたように、最期譚の中心人物を救済する方法は、自分自身で主体的に念仏を唱え功德を積ませるか、その縁者に故人（死に瀕している者の場合もある）の後世を弔わせるかしかない。『保元物語』『平治物語』『平家物語』の場合には、その二つの方法を駆使しながら、救済をはかっている。ここには、渡辺氏が指摘された中古以来続く功德主義的浄土信仰が影響していると考えられる。『太平記』の場合には、念仏や後世を弔う記事自体が

少なく、また簡略になっている。それは、そのような功德主義的浄土信仰の影響が希薄であるからだと考えられる。それでは、『太平記』においては、死に逝く者に対してどのような救済がはかられているのであろうか。その問題に関連して、次に『太平記』で多く見られる従軍僧について考えてみる。

『平家物語』には、従軍僧に関する記述がない。例えば、「嗣信最期」においても、義経は「此辺にたとき僧やある」と言つて僧を探している。この義経の言動から、『平家物語』に描かれる軍団には従軍僧はいなかったことがわかる。しかし、『太平記』の場合は、「赤坂合戦事付人見本間拔懸事」（巻第六）の「是マテ付従フテ最後ノ十念勸メツル聖、二人ガ首ヲ乞得テ、天王寺ニ持テ帰り、本間ガ子息源内兵衛資忠ニ始ヨリノ有様ヲ語ル。」のように、明らかに従軍僧が伴われていることがわかる。このような従軍僧は、これ以外にも

翌ノ朝律僧ヲ二三十人作り立テ京ヘ下シ、此彼ノ戦場ニシテ、尸骸ヲソ求サセケル。（中略）此僧共悲歎ノ泪ヲ押ヘテ、「昨日ノ合戦ニ、新田左兵衛督殿・北畠源中納言殿・楠木判官已下、宗トノ人々七人迄被討サセ給ヒ候程ニ、孝養ノ為ニ其尸骸ヲ求候也。」トゾ答ヘケル。（巻第十五「將軍都落事付薬師丸帰京事」）

サテハ義貞ノ頸相違ナカリケリトテ、尸骸ヲ輿ニ乗セ時衆八人ニカ、セテ、葬礼ノ為ニ往生院ヘ送ラレ、頸ヲバ朱ノ唐櫃ニ入レ、氏家ノ中務ヲ副テ、潜ニ京都ヘ上セラレケリ。（巻第二十「義貞自害事」）

時衆ニ最期ノ十念ヲ受テ、思切タル機ヲゾ顕シケル。（巻第三十九「芳賀兵衛入道軍事」）

のように、数例登場してくる。ここから、このような従軍僧の多くは律宗・時宗の僧であったこともわかる。

松尾剛次氏は、中世の仏教集団を得度・受戒制度を指標として、官僧とその対立概念である遁世僧という概念で説明している（注⁴）。松尾氏が言う官僧とは、国家的祭祀権を有する天皇から鎮護国家を有する資格を認められた僧侶集団であり、遁世僧とは独自の新しい得度・受戒制度（得度制度のみの場合もある）を有することによって成立した集団である。この指標から中世の仏教集団を分ければ、正統派と位置付けられた南都六宗・天台・真言両宗の僧たちが官僧に当たり、異端派とされた念仏僧はもちろんのこと新義律宗や禅宗が遁世僧に当たるこ

となる。松尾氏によれば、この両者は、単に得度・受戒制度の違いだけではなく、その宗教活動においても決定的に異なっている。官僧は「僧尼令」の伝統もあって、中世においても原則として寺外において一人一人の救済のために仏の教えを説くことを禁じられ、寺内において国家や氏のために祈ったのに対して、遁世僧は、寺外に出て現実に生きた一人一人に対面しながら仏の教えを説いたとしている。つまり、遁世僧は、官僧の制約から「自由」である分、現実に生きた一人一人の民に直接、救済を説いたのである。

この松尾氏の説に従うと、従軍僧が『太平記』に多く登場するのは、官僧としての制約から解放された新義律宗や禅僧が、その自由さゆえに従軍でき、戦闘で死に逝く武士を直接救済しようとしたからではなからうか。また、松尾氏は、この禅・律僧が、「武家政権の「官僧」ともなつた」(注41)とも述べている。そうであるならば、それぞれの軍団のお抱え僧として従軍し、最期を遂げる者を救済していたとは考えられないだろうか。

今まで述べてきたことをまとめると、『平家物語』の最期譚に念仏や後世を弔う記事が多いのは、中古以来の功德主義的浄土信仰がその背景にあるためと考えられる。それは、作善の多寡によって往生が決定するという自力的浄土信仰である。『平家物語』では、その功德主義的浄土信仰にのつとつた形で、最期譚の中心人物に念仏を唱えさせるか、その縁者に後世を弔わせることによって救済を施そうとしたため、念仏や後世を弔う記事が多くなっているのではないかと考えられる。

それに対して、『太平記』の最期譚に念仏や後世を弔う記事が少ないのは、『太平記』が書かれた時代には、法然房源空を始めとする新しい念仏宗やその他の新仏教が社会に根を下ろし、『平家物語』に見られる中古以来の功德主義的浄土信仰が衰退していたためと考えられる。その新しい念仏宗とは、弥陀の本願による絶対他力の浄土信仰のことである。それは、生前の念仏や造寺や喜捨などによる作善の多寡によって往生が決定するのではなく、弥陀の本願への信仰自体が問題になってくる。それゆえ、『太平記』においては、最期譚でことさら念仏を唱えさせたり、後世を弔う記事を載せる必然性が希薄になっているのである。

また、鎌倉時代初期から官僧としての制約から逃れた念仏宗・新義律宗・禅宗の僧は、旧仏教の国家や有力な氏族の平安を祈るといふ姿勢から脱却し、現実に生きた民一人一人を救済していこうという動きをみせてくる。その救済活動が、『太平記』の時代（南北朝時代）には、かなり定着し、武士の間でも念仏宗・新義律宗・禅宗による個人的な救済が定着してきたのではないかと考えられる。特にその中でも禅・律僧は武家政権の「官僧」として結びつきを深めていく結果、合戦における禅・律僧の従軍僧が定着してきたのではないだろうか。

『平家物語』の時代には、仏教自体が個人に向いておらず、その上従軍僧なる者も存在しなかった。そのため、『平家物語』に登場してくる武士は、戦場において念仏を唱えるなどの自力救済の方法をとらざるを得なかった。しかし、『太平記』の時代になると、仏教が個人の救済に大きく関与するようになり、また戦場においても従軍僧が近くにいて、安心して戦場で死ねたのではないかと考えられる。

第二節 鎮魂から戦功記録へ

『保元物語』『平治物語』『平家物語』における最期譚を見ていくと、ある特定の人物を中心に話が展開しており、その人物の言動を詳細に描いていることがわかる。ところが、『太平記』における最期譚は、『保元物語』などのそれに比べると、個人（最期譚の中心人物）がそれほどクローズアップされることなく、集団の中の一人として描かれることが多い。したがって、その人物の言動もそれほど詳細には描かれていない。

このことは、最期譚の章段名の違いに顕著に表れている。『保元物語』『平治物語』『平家物語』では、「左府御最後」「信西出家の由来並びに南都落ちの事付けたり最後の事」「妹尾最期」「木曾最期」「越中前司最期」「忠度最期」「敦盛最期」「知章最期」「嗣信最期」のように「人名（官職名）＋最期（最後）」となっている場合が多い。ところが、『太平記』の章段名を見てみると、「楠正行最期事」のように「人名（官職名）＋最期（最後）」となっ

ているものも確かにあるが、割合として非常に少ない。第一章第一節で見たように『太平記』の場合は最期の方が討死より自害が多いためか、「桜山入道自害事」のように章段名が「人名（官職名）＋自害等」となっているものもある。その他、「畑六郎左衛門事」などのように「人名（官職名）」のみの場合もあるが、そのようなものをすべて含めても、三十例に過ぎず、全体（七十六例）の半数にも満たないのである。

それでは、『太平記』の最期譚の多くは、どのような章段名になっているのだろうか。『太平記』の最期譚は、「師賢登山事付唐崎浜合戦事」「吉野城軍事」「山徒寄京都事」「六波羅攻事」などのように、合戦譚としての章段名を持つものが多い（三十七例）。つまり、『太平記』においては、最期譚は合戦譚の一部として位置付けられ、『平家物語』のようにそれ自体が独立した章段として機能しているものは、少ないと言えるのではないだろうか。

もちろん、章段名は各軍記物語の諸本によって異なる。その上、章段名は本文と独立して後代につけられたと考えられる。さらに、軍記物語の章段は、単に内容におけるまとまりとして存在するのではなく、語りのための区切りとしての側面も有している。以上のことから、軍記物語の内容を章段名だけで判断するのは早計であると言えよう。ただし、『保元物語』『平治物語』『平家物語』『太平記』の章段名をそれぞれの諸本で比較した場合、若干の違いはあるものの、今まで述べてきたようなことが言える。また、章段は語りの区分としての側面を確かに持っているが、それも内容と無縁ではないので、大きな傾向として捉える分には大過ないと言える。

『太平記』の最期譚は、合戦譚の一部として位置付けられているのではないかと言うことが章段名からうかがえた。そこで、以下具体的に本文について、他の軍記物語と比較し、その差異を考えてみたい。ただし、『保元物語』『平治物語』は、全体が一つの合戦に過ぎず、用例としてかなり限定されるので、ここでは、『平家物語』と『太平記』の合戦譚における最期譚を比較していくことにする。

『平家物語』の中で、最期譚が多く含まれる合戦は、いわゆる一の谷合戦（巻第九）である。「越中前司最期」「忠度最期」「敦盛最期」「知章最期」のように四つの最期譚を含む。その一の谷の合戦は、「老婆」「一二のかけ

「二度のかけ」「逆落」「越中前司最期」「忠度最期」「重衡生捕」「敦盛最期」「知章最期」「落足」の十の章段から構成されている。この中で「老婆」の内容は、義経が鶴越から急襲するために土地の案内者を探すという戦闘における準備であり、また「一二のかけ」「二度のかけ」は、搦め手における熊谷や平山、大手における河原兄弟の先陣争いの内容なので、戦闘開始前後であることは明らかであり、時間的な位置がはっきりしている。その次の「逆落」の内容（義経が鶴越から急襲する）も「老婆」の内容と関連しており、その後であることは明らかで、また話の内容からも戦闘の最初であることは明らかであり、これも時間的な位置がはっきりしている。さらに、最後に飾る「落足」も、一の谷合戦で討たれた人物を列挙した上で、平家の残党が波に漂う内容なので、これは戦闘の終盤という時間的な位置がはっきりしている。

ところが、「逆落」から「落足」に挟まれた「越中前司最期」「忠度最期」「重衡生捕」「敦盛最期」「知章最期」の章段は、相互に関連性もなく、また本文中に順序を示すような言葉もないために、それぞれの時間的な位置がはっきりしていない。もちろん、これらはすべて合戦中の出来事なので、先に述べた「逆落」から「落足」の間に入るということだけははっきりしているのだが、「越中前司最期」以下の五つの章段についての前後関係ははっきりしていない。その五つの章段の順序は、覚一本では、「越中前司最期」↓「忠度最期」↓「重衡生捕」↓「敦盛最期」↓「知章最期」になっている。これは、「越中前司最期」「忠度最期」が搦め手における戦闘であり、「重衡生捕」「敦盛最期」「知章最期」が大手における戦闘であるという場所的な違いによってまとめて記したのではないかと考えられる。そういえば、同じ先陣争いでも、「一二のかけ」は搦め手における戦闘であり、「二度のかけ」は大手における戦闘である。覚一本では、この一の谷合戦を基本的に搦め手↓大手という順序に従い、場所の違いによって書き分けているようである。

延慶本・長門本・源平盛衰記などの広本でも、原則的に大手・搦め手という場所的な違いによって書き分けられている。しかし、延慶本・長門本・源平盛衰記では、「敦盛最期」↓「知章最期」の順序だけが「知章最期」↓

「敦盛最期」(注⁴)となっている。この順序の異同は、延慶本などの広本に、一の谷合戦についての記事の後、敦盛の首を打った熊谷直実が、敦盛の首を屋島に送るなどの関連記事があり、その記事とのつながりにおいて「敦盛最期」の記事が後にまわされているのではないだろうか。理由はともあれ、このように記事の順序に異同があるということ自体が、それぞれの記事における時間的な位置がはつきりしていないことを示している。

今度は、『太平記』の合戦譚を見てみよう。『太平記』の「金崎城落事」(巻第十八)という章段の中には、「新田義頭・一宮」「氣比大宮司太郎」「由良・長浜」という三つの最期譚が含まれている。しかし、それらの最期譚は、『平家物語』のそれのように、それぞれの時間的位置がいまいな状態で独立して存在するのではなく、時間の経過にしたがって整然と描かれていることがわかる。例えば、「新田義頭・一宮」の最期譚では、新田義頭・一宮の自害の描写に続いて、「頭大夫行房・里見大炊助時義・武田与一・氣比弥三郎大夫氏治・大田帥法眼以下御前二候ケルガ、イザ、ラバ宮ノ御供仕ラントテ、同音二念仏唱テ一度ニ皆腹ヲ切ル」とあるが、その次に語られる「氣比大宮司太郎」の最期譚には、「弥三郎大夫カ自害シテ伏タル其上ニ、自我首ヲ搔落テ片手ニ提、大膚脱ニ成テ死ニケリ」とある。この二つ記事から明らかのように、この「氣比大宮司太郎」の最期譚は、「新田義頭・一宮」の最期譚の後でなければ成り立たず、それぞれの時間的な位置がはつきりしていると見える。

また、「由良・長浜」の最期譚でも、城の木戸口にて最後まで戦う由良・長浜に対して安間六郎左衛門が「何ヲ期ニ合戦ヲバシ給ゾ。大将ハ早御自害候ツルゾヤ」と言っている。この安間六郎左衛門の言葉から、この時点で既に新田義頭と一宮は自害していることは明らかであり、この「由良・長浜」の最期譚も「新田義頭・一宮」の最期譚の後でなければならず、それぞれの時間的な位置が明確であると言える。ただし、「氣比大宮司太郎」の最期譚と「由良・長浜」の最期譚については、その前後関係を直接的に示す言葉はでてこないが、この「由良・長浜」の最期譚をもつて、金崎城における戦闘が終結することを考えれば、「氣比大宮司太郎」の最期譚↓「由良・長浜」の最期譚という順序を考えるのが妥当である。それが証拠に、神宮徴古館本や天正本でも、この「金崎城

落事」の章段における最期譚は、すべて「新田義顕・一宮」↓「氣比大宮司太郎」↓「由良・長浜」の順序になっている。さらに、この合戦譚に限らず、『太平記』の合戦譚における最期譚は、繁簡や出入りはあるものの、順序については、諸本によってほとんど異同がない。このことから、『太平記』の最期譚は合戦譚の中の一部として、他の最期譚などと緊密な関連性を持ちながら存在していると言える。

今まで述べてきたことをまとめると、『平家物語』の最期譚は、時間的な位置がはっきりしないことや最期譚相互に関連性が薄いなど、一つ一つの最期譚が独立した一つの話としての傾向を強く保ったまま合戦譚の中に置かれている。これは、『平家物語』が合戦譚としてよりも最期譚の方に主眼を置いて描いているためであると考えられる。ところが、『太平記』の場合は、一つ一つの最期譚は、相互に関連性を帯びていることが多く、一つの合戦譚として緊密性が保たれている。これは『太平記』が最期譚を合戦譚の一つの要素として意識し、最期譚よりも合戦譚に主眼を置いていたためだと考えられる。それでは、そのような『平家物語』と『太平記』の違いは、なぜ生じているのだろうか。

日下力氏は、『保元物語』『平治物語』『平家物語』『承久記』の四つ軍記物語の成立を鎌倉時代前期の時代状況などから考え、一二三〇年前後からの十年から二十年の間に成立したのではないかと述べている(注²¹)。それによると、承久の乱(一二二一年)以前は、実朝の暗殺や鎌倉幕府の御家人同士の勢力争いなどで内紛が絶えなかったため、世情も安定せず、そのような状況下では、軍記物語のような武士についての物語を書けなかった。しかし、乱後は、宝治元(一二四七)年の三浦一族の乱まで世情を揺るがすような目立った事件は起こらない。そのため、この比較的安定した時代に『平家物語』などの四つの軍記物語は成立したのではないかとしている。また、その時期には、御成敗式目が北条泰時によって制定され(一二三二年)、鎌倉の武家による政治は固定期に入る。そのような中で、武家勢力と宮廷勢力との力関係も次第に安定したものとなっていき、武士のみならず、貴族をはじめとする都の人々も落ち着いていた生活を送れるようになっており、軍記物語によって過去を振り返る余

裕が出てきたのではないかとしている。

また、承久の乱によつて後鳥羽院以下の倒幕派が権力の座から失脚し、後堀河天皇がわずか十歳で即位することになる。この後堀河天皇の父は、後高倉院であり、平家とともに都を落ちた高倉院の皇子である。この後高倉院の乳母は、もともと平知盛の北の方（四条局）であり、壇ノ浦から帰京後は、それに代わつて同族の平頼盛の娘が乳母となつている。また、後堀河天皇の母は、後高倉院の乳母（平頼盛の娘）の子、つまり平頼盛の孫にあたる。さらに、後堀河天皇の乳母は、小松一族を中心として平家と深い姻戚関係にある藤原成親の娘（成子）である。このように、承久の乱を契機として平家のゆかりの人物が、次々と宮廷内に返り咲き、そのネットワークを築くようになっていく。日下氏は、このような平家のゆかりの人物が宮廷社会に根をおろしていたという状況も『平家物語』以下の軍記物語を成立させる要因となつたとしている。

日下氏の指摘のように、『保元物語』『平治物語』『平家物語』が承久の乱後の比較的平和な時期（四条朝）に成立したとすると、藤原成子（藤原成親の娘）などの平家の血筋にあたる人物や平家に関連のある人物が、宮中の中枢部に多数存在したことになる。その宮廷における平家のネットワークは、皇族の乳母などの立場を利用しながら、宮廷に権勢をふるつており、そのような状況下で『平家物語』などの軍記物語が成立したとすれば、そこに登場してくる人物（特に平家にゆかりのある人物）に対しては配慮がなされるに違いない。特に戦乱によつてはかなく散つた平家の公達に対する鎮魂という思いが込められるのは、当然のことではないだろうか。最期譚は、そのような人物たちの生の終焉を描いたものであり、最も鎮魂という思いが込められる個所であつたと考えられる。したがつて、『平家物語』の最期譚は、治承・寿永の戦乱で亡くなった人々の鎮魂という目的のため、できるだけ一人一人の人物に焦点を当て、その華々しい生の終焉を詳細に描こうとしたのであろう。

そのような『平家物語』の成立時の状況に比べて、『太平記』はかなり異なつていたようである。『太平記』の成立状況について、今川了俊の『難太平記』（注⁴³）の記事から考えてみたい。

昔等持寺にて法勝寺の恵珍上人此記を先三十余卷持参し給ひて錦小路殿の御目にかけられしを。玄恵法印によませられしに。おほく悪ことも誤も有しかば。仰に云。是は且見及ぶ中にも以の外ちがひめおほし。追て書入。又切出すべき事等有。其程不可有外聞之由仰有し。後中絶也。近代重て書続けり。次でに入筆共を多所望してかゝせければ。人高名数をしらず書り。さるから、随分高名の人々も且勢ぞろへ計に書入たるもあり、一向略したるも有にや。

まず、『平家物語』との大きな違いは、書かれた内容が実際の戦乱があつた時代に非常に近いということである。『平家物語』の場合、書かれている内容は治承・寿永年間（一一七七年～一一八五年）が中心であり、日下氏が指摘する四条朝までは、既に五十年ほどが経過していることになる。『平家物語』において一番新しい記事である「六代被斬」（一一九八年）にしても、それから少なくとも三十年以上が経過していることになる。ところが、『太平記』の場合は、この『難太平記』の記事に、恵珍上人が草稿を錦小路殿（足利直義）に提出していることが書かれており、そのことから考えると、少なくとも直義が隠遁生活を余儀なくさせられた貞和五（一三四九）年以前でなければならぬ。もちろん、この『難太平記』における恵珍上人が錦小路殿に持参したという『太平記』は、貞和五（一三四九）年以降の記事も含む現存する『太平記』と同じものであるはずはないが、仮に鎌倉幕府の滅亡（一三三三年）までの内容までだったとしても、二十年未満ということになる。つまり、『太平記』の原型は、戦乱の直後（現在の『太平記』を基準にして考えるならば、戦乱の最中）に成立していることになる。そのような時期に書かれたとすれば、実際にその戦闘に参加したり、関与したりした人物の多くが生き残っていた時代であり、その争乱の記憶がまだ生々しく人々の中にも残っていたに違いない。

しかも、その草稿が足利直義に提出されているということから考えれば、この『太平記』が、この時期一応の勝利を収めていた足利政権（將軍家）側の主導による公式な記録として編纂されていたのではないかと考えられる。直義の「是は且見及ぶ中にも以の外ちがひめおほし。追て書入。又切出すべき事等有」という言葉からする

と、恐らく直義のもとにもたくさん資料が集められており、その内容と食い違っている部分が多かったであろう。また、直義が「其程不可有外聞」という慎重な態度で臨んでいることから、この『太平記』が単なる文学作品としてではなく、室町幕府にとってかなり重要な文書として意識されていたことがわかる。このように『太平記』が、室町幕府側の公式記録という意図のもとに編纂されてきたとするならば、それが公式記録である以上、室町幕府に所属する武士たちにとって、そこに自分もしくは父祖の戦功が描かれるか否かによって、室町幕府における自分の位置が大きく変わってくると思われる。そうなれば、自分もしくは父祖の戦功の資料をその編纂に携わる直義や玄恵法印、恵珍上人の元に持参するに違いない。逆にそのように室町幕府に所属する武士たちの関心を集める文書であるがゆえに、直義も「其程不可有外聞」という慎重な態度で臨んだのではないだろうか。そのことは、『難太平記』の「次でに入筆共を多所望してかゝせければ。人高名数をしらず書り。さるから、随分高名の人々も且勢ぞろへ計に書入たるもあり」という記事からもうかがえる。いったん中絶した編纂事業の後も、先の事情から続々と戦功の書入れを願う武士たちの陳情に耐えきれず、次々に書き入れされていったのである。現に今川了俊も『難太平記』の別の個所で、自分の父（今川範国）の功績についての記述がないことを不服に思っており、折があればその資料を提出し、『太平記』の改訂を望んでいる。このように『太平記』は、自分や父祖の戦功を『太平記』の中に留めようとした武将からたくさん資料が提出され、その利害関係を調整しようとして、次々に記載していった結果、記事がどんどん膨らんでいき、現在のようになつていったのではないだろうか。そのような状況下では、戦乱によつて死んでいった者の魂を鎮めようとすることに主眼が置かれることはなく、その功績を記録に留めることに主眼が置かれるであろう。したがつて、最期譚も、死によつて主君に対する忠義を示す戦功の一つの指標として描かれていると考えられる。そのことは、『平家物語』の最期譚では、嗣信以外に主君の身代わりとなつて死ぬ話はないが、『太平記』の最期譚では、村上義光をはじめとして主君の身代わりとなつて死ぬ話が多くある点からもうかがえる。

以上の述べてきたことをまとめると、『平家物語』の最期譚は、合戦譚の一部として描かれるのではなく、それ自体が一つの独立した話としてのまとまりを有したまま、合戦譚の中に置かれている。そこには、『平家物語』の成立した時代の影響が考えられる。『平家物語』が成立した時代は、承久の乱後の比較的世情が安定し、しかも、乱の結果、平家ゆかりの人物が宮廷内に厳然とした勢力を持ち、多数活躍するようになった時代である。そして、源平争乱から既に半世紀以上が経過し、その戦乱の生々しさは人々の記憶の中から徐々に風化しつつあり、落ちていて過去を振り返ることもできた。そのような状況の中で『平家物語』が成立したとすると、平家の武将の死に様を描く最期譚は、当然その人物の魂を鎮めようという方向で書かれていくことになる。

一方、『太平記』の場合は、その成立した時代が『太平記』に書かれている内容からあまり年月が経っていない時期であり、実際に登場している人物やそれらに関係する人物が多数生き残っていた時代である。また、『太平記』が室町幕府の主導によって編纂されたという経緯を持ち、室町幕府側の公的な記録という色彩を持つため、多数の武士達の利害関係が絡むという問題を孕んでいる。そのため、戦闘で亡くなった人物の魂を鎮めるといふ目的よりも、もっぱらその利害関係の調整が追求されたのではないかと考えられる。したがって、『平家物語』のような個人中心の最期譚というものがほとんど見えなくなり、誰がいつどこで戦死したのかという報告書的な内容になり、さらに『難太平記』の記事にあるように、各武将から自分および父祖の戦功に関する報告書が多数提出され、それを整理していくうちに、ただ名前の列記ばかりを多く連ねるような最期譚になったのではないかと思われる。つまり、『太平記』の最期譚では一人一人の死に様を詳しく描くということよりも、各武将の利害調整のためと紙面の制約から、とにかく名前だけでも確実に書くことが最優先されたのではないかと考えられる。

第三節 貴族社会から武家社会へ

第一章第一節で詳しく見てきたように、最期譚における最期を遂げる方法は、各軍記物語においてかなり違いが見られた。しかし、軍記物語の最期譚においては、このような最期を遂げる方法だけではなく、死の記述内容にもかなり違いが見出せる。例えば、『太平記』においては、

焼ハテ、後、一堆ノ灰ヲ払ノケテ是ヲ見レバ、女房ハ焼野ノ雉ノ雛ヲ翅ニカクシテ、焼死タル如ニテ、未胎内ニアル子、刃ノサキニ懸ラレナガラ、半ハ腹ヨリ出テ血ト灰トニ塗タリ。(巻第二十一「塩冶判官讒死事」)のように、死に至る様子や死体の有様を生々しく描写している場面が数多く見られる。しかし、『平家物語』では、熊谷あまりにいとおしくて、いづくに刀をたつべしともおぼえず、めもくれ心もきえはてて、前後不覚におぼえけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣々頸をぞかいてげる。(巻第九「敦盛最期」)

のように、死に至る様子は簡単に記すに留まり、流血や凄惨な死体の様子などをほとんど記さない。小西甚一氏は、『太平記』では流血や凄惨な死の様子が描かれるのに、『平家物語』では現実の肉体をもつた者が殺されて血を流す場面はまったく現れないとし、それを仏教思想上の問題として取り上げている。それによれば、『太平記』において血や凄惨な死の様子が描かれるのは、苦しまなければ死ねない人間の業を直視し、しかもその人間の往生を信ずる法然以後の浄土思想の影響だとし、それに対して、『平家物語』において描かれる死は、事象として「死ぬこと」であって、肉体をもつ人間の「死にざま」ではないとし、天台ふうの観想的な浄土信仰の影響だとしている(注4)。

『保元物語』『平治物語』『平家物語』には、程度の差はあるが流血を伴うような死の描写は少なく、『太平記』『義経記』『曾我物語』には、流血を伴うような凄惨な死の描写が多い。それは、小西氏が指摘したように、天台ふうの観想的な浄土信仰の影響と法然以後の浄土思想の影響によると考えられる。しかし、そのような仏教思想上の問題以外にも、このような死の描写に違いをもたらす原因となったものが考えられる。

一つは、最期譚のもとになる話の現場性の問題である。『太平記』の場合は、第三章第二節でも述べたように、

書かれた内容と成立した時代が非常に近く、実際に戦場において死に逝く者の様子を見た者（従軍僧や武士）が多く生き残っていたと考えられる。まず、その中の従軍僧について考えてみる。

先に述べた仏教思想上の問題とも関連してくるのだが、『太平記』の成立した南北朝時代前後には、鎌倉時代から起こった新仏教が定着し、絶対他力の浄土信仰や新義律宗・禅宗の僧たちが活躍していた。このような新仏教の僧は、国家の統制から基本的に自由な立場にあり、寺の外に出て、直接民衆の一人一人に救済を説くことができた。特に新義の律宗・時宗などの僧は、従軍僧として活躍し、戦場において死に逝く武士たちの救済のために働いたことがわかる。また、この律宗・時宗などの従軍僧は、戦場において敵味方の武士から攻撃を受けなかった制外的な立場であったことも、『太平記』の記述（巻第六「赤坂合戦事付人見本問拔懸事」）などからわかる。このように新義の律宗・時宗の僧は、従軍僧として戦場に赴き凄惨な武士の最期の有様を多く目の当たりにしたと考えられる。『太平記』は、このような僧たちの話を多く吸い上げて編纂されたのであろう。

また、第三章第二節でもあげた今川了俊の『難太平記』に登場する恵珍上人（文観）や玄恵法印（円観）も南都系と北嶺系の違いはあるが、ともに新義律宗の僧である。おそらく、その配下にはたくさん従軍僧たちを抱え、その配下の僧たちから聞いた話を収集して『太平記』を編纂していったのではないかと考えられる。つまり、『太平記』における最期譚は現場に密着した話をもとにして出来上がっており、そのため、あのような流血を伴うような凄惨な死の様子を描くことができたのであろう。

この現場性の問題を考える場合、『愚管抄』の次の記事は注目に値する。『愚管抄』の中にも、流血の描写はほとんど出てこないが、

ソレニグシテ見タル者ノ申ケルハ、（中略）蓮花王院ノ西ノツイチノキハヲ南ザマヘ逃ケルニ、ソノ程ニテ
ヲ、ク射カケ、ル矢ノ、鞍ノシヅハノ上ヨリ腰ニ立タリケルヲ、ウシロヨリ引ヌキケル。ク、リメヨリ血ナ
ガレ出テケリ。サテ南面ノスエニ田井ノアリケル所ニテ馬ヨリ落ニケリ。（中略）トゾ聞ヘシ。（巻第四）

のように、現場で直接見た者の話を載せる場合には、流血の描写がある。このように、現場で直接その様子を見た者の話をもとにしないとその様子を詳細に描くことは難しかったのではないだろうか。

もちろん、『太平記』にはたくさんさんの最期譚があり、そのすべてについて、詳細な情報が得られたとは考えにくい。しかし、細川涼一氏が指摘しているように、新義律宗の中の齋戒衆と呼ばれる半僧半俗の集団をはじめとして新仏教の僧たちが、旧仏教が忌避したような非人救済や葬送などの穢れに抵触するような活動を行っていた(注45) ことなどを考えると、そのような活動を通して死人を目の当たりにする機会も多く、そこからの連想として容易に凄惨な死の様子を思い描くことが可能ではなかったかと考えられる。

このような従軍僧だけでなく、『太平記』の場合には、実際に戦闘に参加した多くの武士の話も多数寄せられたと考えられる。第三章第二節でも述べたように、『難太平記』の記事などから、『太平記』は室町幕府としての公的な記録としての色彩を持っており、そのため武将たちは自分もしくは父祖の戦功に関わる資料を、その編纂に携わる錦小路殿(足利直義)・玄恵法印・恵珍上人などに提出していた。先に述べたようにこの時期には、まだ戦乱を体験した多くの武将が生き残っている時代であり、その話は現場に密着した生々しいものであったに違いない。もちろん、その中には現場で直接見ていないものや戦功記録のために誇張したものも含まれるかもしれないが、話の出所は武士であり、武士は戦場の生々しい凄惨な死の様子をいつも目の当たりにしており、そのような話を作り上げるのは容易なことだったと考えられる。また、『義経記』『曾我物語』においても『太平記』と同じように凄惨な死の様子が描かれている。しかし、その内容は『平家物語』とほぼ同じ時代のことであるため、『太平記』のように現場を直接見てきた人間の話などを取り込むことは不可能であったと考えられる。ところが、その創作の過程において、南北朝の戦乱で見てきた凄惨な死の様子を重ね合わせることが容易にできるために、『太平記』と同じように凄惨な死の様子が描くことができたと考えられる。

それに対して、『平家物語』の場合は、その書かれた内容と成立した時代には半世紀以上の時間が経過している。

もちろん、その当時に戦乱を体験した人間が若干残っていたとは考えられるが、『太平記』のようにたくさん残っていたとは考えられない。しかも、その体験者たちの記憶も、半世紀という時間の経過とともに風化し、『太平記』のように生々しい記憶として残っていたとは考えられない。したがって、凄惨な死の様子などを描くことが難しかったのではないかと考えられる。

『平家物語』の成立について具体的にどのような人物が関わったのかは、定かではない。しかし、その内容から中古以来の浄土信仰の影響が考えられ、その担い手だった旧仏教（南都六宗・天台・真言両宗）の僧たちが関与したのではないかと考えられる。それら旧仏教の僧侶たちは、原則として寺外において一人一人の救済のために仏の教えを説くことを禁じられ、寺内において国家や有力氏族のために祈っていた。そのため、『太平記』で見られるように従軍僧として活躍することもなく、戦闘によって凄惨な死を遂げる武士の様子などを見ることはほとんどなかったと考えられる。また、新仏教の僧が行っていたような民衆の葬送などの活動もあまりしておらず、凄惨な死の様子を連想してその話を創作することも困難であったのではないだろうか。

『保元物語』『平治物語』に關しても、成立時代が『平家物語』とほぼ同じであり、その内容が『平家物語』以前であることを考えれば、『平家物語』と同じように現場に密着した話を取り入れるのが難しかったのではないかと考えられる。しかし、『保元物語』では、頼長の場合だけに直接死に結びつく流血の描写が見られた。この頼長の最期譚の流伝過程については、原水民樹氏が詳しく考察している（注46）が、朝廷に出頭し報告した興福寺僧玄蹟にしろ、頼長の近親であった経憲にしろ、慈円に語った「仲行ガ子」にしろ、すべて頼長の逃避行もしくは臨終を看取った人物及びその関係者であり、現場に密着した話もたらされていいると考えられる。このため、『保元物語』では、この頼長の最期譚だけ流血を伴う詳細な記事になっているのではないかと推測される。つまり、頼長の最期譚のように特別な例を除けば、『保元物語』『平治物語』『平家物語』においては、現場に密着した話ほとんど得られなかったのではなからうか。

また、それぞれの軍記物語の成立時における社会が、そのような凄惨な最期譚の記述を受け入れるような雰囲気を持ち得たかという問題がある。第三章第一節でも述べたように、『平家物語』が成立した時代は、平家ゆかりの人物たちが宮中に権勢をふるっていた。それらの人物が『平家物語』の成立に直接関わったのかどうかはわからないが、少なくとも何らかの形で影響を及ぼしていたと考えられる。それならば、リアルに凄惨な死の様子を描くのではなく、鎮魂という思いを込めて治承・寿永の戦乱で命を落とした平家の武將たちの最期をできるだけ華々しくかつ哀調を伴ったような話へと作り上げていくのではないだろうか。現存する日記類に『平家物語』の最期譚に関連する記事はほとんどないが、仮に争乱を生き残った武士などによるリアルな話もたらされていたとしても、『平家物語』の中に吸収されていくうちに、その時代の宮中を中心とした貴族社会の要請により、そのような凄惨な死の記述は削除されていったのではないかと考えられる。

これに対して、『太平記』の成立時の状況を『難太平記』の記事から推測すると、その編纂に携わったのは、武士（足利直義）と新義律宗の僧（円観・文観）であり、それ以後にも書き継がれていったとしても、それを要請したのは武士たちと考えられる。これらの人間は、戦闘において人間の凄惨な死に様を多く目の当たりにしてきたので、それを忌避することもなかったのではないだろうか。

山下宏明氏は、この『平家物語』と『太平記』の死に関わる描写の違いについて、『平家物語』には同化的接近の姿勢があり、『太平記』には対象から遊離した高踏性があり、冷酷無残に客観的に死の描写を行っている（注47）と指摘している。山下氏は、その理由については述べていないが、先述したように『平家物語』の成立の背景には宮中で活躍する平家ゆかりの人物たちがおり、その平家ゆかりの人物の眼を介して最期譚が描かれているために、このような「同化接近の姿勢」が出ているのではないかと考えられる。それに対して、『太平記』では、武士や律宗僧などの凄惨な死の様子を見続けた人物の眼を通して描かれているため、「対象から遊離した高踏性があり、冷酷無残に客観的に死の描写を行っている」のだと考えられる。

以上述べてきたことをまとめると、軍記物語の最期の記事は、凄惨な死の様子を描くか否かで大きく分けられる。『保元物語』『平治物語』『平家物語』は、そのような凄惨な死の様子はほとんど描かないのに対して、『太平記』『義経記』『曾我物語』はそれを多く描いている。その原因として、以下の三つのことが考えられる。

まず、小西氏が述べている仏教思想上の問題が関係していると思われる。『保元物語』『平治物語』『保元物語』が成立したと考えられる鎌倉時代前期は、まだ中古以来の浄土信仰が主流であり、作品の中にもその影響がうかがわれる。それは極楽浄土を観想し、希求する浄土信仰であり、現実の人間の死に向き合ったものではなかった。それに対して『太平記』『義経記』『曾我物語』の成立した南北朝時代前後は、人間の死と直接向き合う中から往生を願う浄土信仰の定着した時代である。そのような信仰の違いが、死の描写にも影響を与えているのである。

次に考えられるのは、最期譚のもとになった話の現場性の問題である。『保元物語』『平治物語』『平家物語』は、その内容と成立した時代が少なくとも半世紀以上離れている。そのため、その戦乱を生き残った人物が多少生き残ったとしても、その記憶は徐々に風化しつつあり、生々しい死の様子などは描きにくかったのではないだろうか。それに対して、『太平記』は、その内容と成立した時代がかなり近く、生々しい情報を多数得ることができた。しかも、戦闘に律宗・時宗などの僧が従軍しており、その僧たちのもたらした情報も凄惨な死の様子を描くのに役立つに違いない。さらに、『太平記』が室町幕府としての公的記録としての色彩を持つために、武士たちがこぞって情報を提供しており、そのことも現場に密着した情報がもたらされた原因の一つであろう。このように、『保元物語』『平治物語』『平家物語』は、現場に密着した生々しい情報を得ることが難しかったのに対して、『太平記』はその成立事情から現場に密着した情報を得やすかったのである。

最後は、それぞれの軍記物語の成立した社会の問題である。『保元物語』『平治物語』『平家物語』の成立した時代は、平家ゆかりの人物が宮中に権勢をふるっていた。そのため、『平家物語』の叙述には、そこに登場する平家関連の人物の魂を鎮めるといふ目的が持たされ、その人物の凄惨な死の様子などはできるだけ描写せず、華々し

くかつ哀調を持って生の終焉を迎えるような話に仕上げたと思えられる。それに対して『太平記』は、凄惨な死に様を目の当たりにする機会の多い武士や律宗僧といった人物たちによつて編纂されている。そのため、そのような生々しい死の様子を忌避することもなかったのではなからうか。

ただし、『保元物語』『平治物語』については、宮中に権勢をふるっていた平家ゆかりの人物と関連が薄く、鎮魂のために凄惨な死の記述を意識的に減らしていったとは考えにくい。しかし、第二章第一節でも述べたように、『保元物語』『平治物語』は同時代に成立した『平家物語』と互いに影響を及ぼしあっていたと考えられ、「平家」語りが『保元物語』『平治物語』を語ることまで含んでいたことからわかるように、大部な『平家物語』が『保元物語』『平治物語』に与えていた影響は大きかったと考えられる。そのため、『平家物語』の描写にならつて凄惨な死の様子などが描写されなくなったのではないかと考えられる。同じようなことは『義経記』『曾我物語』についても言える。『義経記』『曾我物語』は、成立した時代から考えて『太平記』のように現場に密着した情報は、ほとんど得られなかったと考えられるが、『平家物語』と『保元物語』『平治物語』の関係のように、大部な『太平記』の影響を多分に受け、書かれていったのではないかと考えられる。

以上、最期譚の記述内容の違いについて述べてきたが、それらを総合的に考えると、そのような差異は、軍記物語の成立の中心となる世界が貴族社会から武家社会へ移動するという変化の中で生じていると考えられる。『保元物語』『平治物語』『平家物語』は、戦乱の内容を描いてはいるが、その成立の中心となる世界は、都の貴族社会である。その貴族社会は、平家ゆかりの人物による人的ネットワークや観想的浄土信仰などによつて支えられており、それらが相互に作用しあつて一つの場を形成していたと考えられる。『保元物語』『平治物語』『平家物語』は、このような場のもとで成立し、その影響を多分に受けている。ところが、鎌倉時代を経て南北朝時代に至ったとき、『太平記』などを生み出す母体は、同じ都でも室町幕府を中心とする武家社会へと移動している。その武家社会は、武士や律宗僧などという人的ネットワークと新しい浄土信仰などによつて場が形成され、『太平

記』『義経記』『曾我物語』もその場の影響を多分に受けながら成立しているのである。

終章 中世における最期譚の位置

これまで、『保元物語』『平治物語』『平家物語』『太平記』という中世を代表する軍記物語の最期譚に焦点を当てて考察してきた。その中で、各軍記物語の最期譚は、それぞれの成立事情によって、その描き方がかなり異なっていることがわかった。しかし、描き方に違いはあるものの、どの軍記物語も最期譚を重視して描いていることでは、共通している。それは、軍記物語における最期譚が、ただ死という事実の報告だけではなく、死を描くことによってその人物の生を凝縮して描くものだからであろう。間近に迫ってくる死ゆえに、逆にその人物の生が引き立ってくるのである。そういう意味で、生と死は表裏一体の関係と言えるのではないだろうか。

軍記物語は、「主として古代末期から中世全期にかけての叙事文学作品系列の呼称」という定義がなされている（注48）が、古代末期に軍記物語の先蹤となった『将門記』が描く平将門の乱は、古代の秩序を揺るがす事件であった。また、本稿で取り上げた『保元物語』が描く保元の乱は、慈円が「保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本国ノ乱逆ト云コトハヲコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ」（『愚管抄』巻第四）と言っているように、古代国家の終焉を決定的にした事件であり、梶原正昭氏も指摘する（注49）ように、これは慈円だけの時代認識ではなく、同時代の人々に共通した感慨であったと考えられる。つまり、軍記物語は、そのような戦乱を糧としながら隆盛していったのである。そして、戦乱が終結し、世情が比較的安定する近世を迎えるに至って、軍記物語も衰退を迎えていくのである。軍記物語は、まさに激動の中世を映す鏡なのである。

そのような戦乱が打ち続く中世において、人々は常に死と背中合わせに生きてきたに違いない。それは、実際に合戦に赴き、死の危険にさらされていた武士はいうまでもなく、それ以外の人々も、死を間近に見る機会が多

かったに違いない。そのように人々が死に向かい合う時代であるがゆえに、軍記物語は、最期譚を重く扱い、その最期を語ることによつて、逆にその人物の生を描こうとしたのではないかと考えられる。そして、また力を込めて描かれるがゆえに、そこには、そのような凝縮された生だけではなく、信仰や政治状況などが色濃く出てくることになり、各軍記物語における最期譚の差異を示すことになったのであろう。

これまで、南北朝時代までの四つの軍記物語の最期譚に焦点を当てて考えてきた。しかし、軍記物語は南北朝時代の『太平記』で終わることなく、室町時代以降も『応仁記』『太閤記』などへと続いていく。しかも、現存する軍記物語の大半は、室町時代以後に成立しているのである。しかし、そのような作品の中にも、最期譚は綿々と描き続けられているのである。今後、室町時代や戦国時代まで時代を広げて、通史的に軍記物語における最期譚を研究していこうと思う。

注

注1 崔文正 『平家物語』の死の様相と論理」(『軍記と語り物』三十号、一九九四・三所収)。

注2 崔文正 『太平記』の死の様相と論理」(『国際日本文学研究集會會議録』第十八卷、一九九五・一〇所収)。

注3 新日本古典文学大系⁴3 『保元物語 平治物語 承久記』(岩波書店、一九九二・七)。

注4 日本古典文学大系³1 『保元物語 平治物語』(岩波書店、一九六一・七)。

注5 『延慶本平家物語 本文篇上・下』(勉誠社、一九九〇・六)。

注6 『長門本平家物語の総合研究 第一・二巻 校注篇上・下』(勉誠社、一九九八・二)。

注7 国文叢書第七・八巻 『源平盛衰記 上・下巻』(博文館、一九一一・二)。

注8 『屋代本高野本対照平家物語一・二・三』(新典社、一九九〇・五)。

注9 日本古典文学大系³2・3 『平家物語上・下』(岩波書店、一九五九・二)。

- 注 10 『神宮徴古館本太平記』（和泉書院、一九九四・二）。
- 注 11 新編日本古典文学全集 54 ～ 57 『太平記①～④』（小学館、一九九七・四）。
- 注 12 日本古典文学大系 34 ～ 36 『太平記一～三』（岩波書店、一九六〇・一）。
- 注 13 半井本では、佐渡兵衛重貞が射た矢としている。慈円の『愚管抄』には、二つの説が載っており、第三章第三節でも述べるように、頼長最期譚の流伝過程による異同と考えられる。
- 注 14 源為朝の場合、金刀比羅宮本では流罪となっており、その後の消息については詳しく記さないが、半井本では、流罪後の為朝が鬼島を制圧し、最期は自害（切腹）したことまで詳しく記している。また、金刀本では、義朝の身代わりとなつて佐渡式部大夫が自害（切腹）しているが、これも金刀本においては、異同が見られる。このような異同については、第二章第一節で詳しく述べることにする。
- 注 15 信西の最期についての記述が、金刀比羅宮本と半井本で異なっている。金刀比羅宮本では、信西は生きのまま敵に見つかり、そこで斬首されている。しかし、半井本では、信西は生きのまま地中に埋まり、生存中に敵に見つかるうとしたため、その前に自害している。
- 注 16 仏書刊行会編『大日本仏教全書』（名著刊行会・一九八〇・一一）。
- 注 17 横島真弥「『ばさら』論——『太平記』を中心に——」（『玉藻』三十四巻、一九九八・九所収）。
- 注 18 米谷豊之祐「武士団の成長と乳母」（『大阪城南女子短期大学研究紀要』巻七、一九七二所収）。
- 注 19 秋山喜代子「乳人について」（『史学雑誌』第九九編第七号、一九九〇・七所収）。
- 注 20 吉海直人『平安朝の乳母達——『源氏物語』への階梯——』（世界思想社、一九九五・九）。
- 注 21 日下力『平家物語の誕生』（岩波書店、二〇〇一・四）。
- 注 22 『国史大事典』第六卷（平凡社、一九九四・二）。
- 注 23 『玉葉』・『山槐記』治承元年七月二十九日条。

注 24 『吾妻鏡』元暦二年二月十九日条。

注 25 佐々木紀一「小松の公達の最期」(『国語国文』第六十七卷第一号、一九九八・一所収)。

注 26 『玉葉』『山槐記』治承三年十一月二十一日条。

注 27 注4の解説によれば、半井本系統諸本のうち、内閣文庫蔵本(新古典文学大系本の底本)は、付録に「于時寛延四辛未(一七五一)年仲春春半井本再校シテ改之」とある。また、彰考館文庫蔵半井本は、下巻末に「右保元物語元禄辛未(一六九一)書以森尚謙所伝借半井本驢庵本謄写焉」とあり、ともに江戸時代の書写であることがわかる。ただし、両本は、「文保二(一三二八)年八月三日書写了」という奥書を持つ『保元物語』諸本中最古本である彰考館文庫蔵文保本(上・下巻欠、中巻のみ)とほとんど異同がないことから、ここで金刀本との異同を問題にしている部分は下巻であるが、『太平記』の直接的な影響はないと考えるのが妥当であろう。

注 28 注4の解説。

注 29 『百鍊抄』平治元年十二月十七日条。

注 30 注4の二二八頁注七。

注 31 『平治物語』諸本の場合、「平治絵詞」以外には、鎌倉時代の書写のものはない。

注 32 屋代本においては、木曾義仲の最期の部分が欠巻になっている。ただし、妹尾の最期については、広本と同じように従者を自害としているものの、覚一本と同じように簡略に記すに留まっております、覚一本と同じように最期譚の差別化が図られていると考えられる。

注 33 小林美和『平家物語の成立』(和泉書院、二〇〇〇・三)。

注 34 兵藤裕己『平家物語の歴史と芸能』(吉川弘文館、二〇〇〇・一)。

注 35 『玉葉』治承四年五月十五日条、『山槐記』治承四年五月十六日条。

注 36 『玉葉』治承四年五月二十六日条。

注 37 『百鍊抄』治承四年五月二十六日条。

注 38 『百鍊抄』治承四年五月二十八日条。

注 39 渡辺昭五「太平記語り手としての禅律僧」(『国学院雑誌』九九卷八号、一九九八所収)。

注 40 渡辺貞麿『平家物語の思想』(法藏館、一九八九・三)。

注 41 松尾剛次『鎌倉新仏教の成立―入門儀礼と祖師神話―』(吉川弘文館、一九八八・七)。

注 42 「知章最期」「敦盛最期」は、覚一本の章段名であり、延慶本以下の諸本では章段名は異なる。ここでは、便宜的にすべて覚一本の章段名を用いて説明している。

注 43 『群書類従・第二十一輯 合戦部』(平文社、一九三一・一二)。

注 44 小西甚一「平家物語の原態と過渡形態―本文批判の基礎的態度―」(『東京教育大学文学部紀要』第十輯、一九六九・三所収)。

注 45 細川涼一『中世の律宗寺院と民衆』(吉川弘文館、一九八七・一一)。

注 46 原水民樹「頼長の死を語る男たち―保元の乱伝承考―」(『国語と国文学』第六一卷七号、一九八四・七所収)。

注 47 山下宏明「『太平記』に見る死の諸相―『平家物語』と比べて―」(『国文学 解釈と鑑賞』、第五六巻八号、一九九一・八所収)。

注 48 『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八四・一)。

注 49 梶原正昭『軍記文学の位相』(汲古書院、一九九八・三)。

一行五〇字、一頁二〇行、一頁当り一〇〇〇字、四〇〇字換算二〇〇枚。

五〇字×二〇行×八〇頁÷四〇〇字＝二〇〇枚。

参考文献

参考文献として、本稿に引用したものののみを取り上げた。

論文に関しては、単行本、雑誌にかかわらず、原則として掲載順に記載するものとする。
発行、発表年次の表記に関しては、その文献の記載の表記に従うものとする。

【書籍】

新日本古典文学大系 43 『保元物語 平治物語 承久記』（岩波書店、一九九二・七）。

日本古典文学大系 31 『保元物語 平治物語』（岩波書店、一九六一・七）。

『延慶本平家物語 本文篇上・下』（勉誠社、一九九〇・六）。

『長門本平家物語の総合研究 第一・二巻 校注篇上・下』（勉誠社、一九九八・二）。

国文叢書第七・八巻 『源平盛衰記 上・下巻』（博文館、一九一一・二）。

『屋代本高野本対照平家物語一・二・三』（新典社、一九九〇・五）。

日本古典文学大系 32・33 『平家物語上・下』（岩波書店、一九五九・二）。

『神宮徴古館本太平記』（和泉書院、一九九四・二）。

新編日本古典文学全集 54 57 『太平記①④』（小学館、一九九七・四）。

日本古典文学大系 34 36 『太平記一〜三』（岩波書店、一九六〇・一）。

仏書刊行会編 『大日本仏教全書』（名著刊行会、一九八〇・一一）。

『玉葉』（哲学書院、一九〇一・二）

増補資料大成 『山槐記』（臨川書店、一九六五・九）

新訂増補国史大系 『吾妻鏡』（吉川弘文館、一九八〇・四）

新訂増補国史大系 『百鍊抄』（吉川弘文館、一九八一・二）

- 日本古典文学大系 25 『今昔物語集四』(岩波書店、一九六二・三)。
日本古典文学大系 37 『義経記』(岩波書店、一九五九・五)。
新訂増補国史大系 『宇治拾遺物語 古事談 十訓抄』(吉川弘文館、一九三二・一〇)。
日本思想大系 7 『往生伝 法華験記』(岩波書店、一九七四・九)。
『群書類従・第二十一輯 合戦部』(平文社、一九三一・一二)。
日本古典文学大系 86 『愚管抄』(岩波書店、一九六七・一)。

【単行本】

- 渡辺貞麿 『平家物語の思想』(法蔵館、一九八九・三)。
吉海直人 『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯―』(世界思想社、一九九五・九)。
日下力 『平家物語の誕生』(岩波書店、二〇〇一・四)。
小林美和 『平家物語の成立』(和泉書院、二〇〇〇・三)。
兵藤裕己 『平家物語の歴史と芸能』(吉川弘文館、二〇〇〇・一)。
松尾剛次 『鎌倉新仏教の成立―入門儀礼と祖師神話―』(吉川弘文館、一九八八・七)。
細川涼一 『中世の律宗寺院と民衆』(吉川弘文館、一九八七・一一)。
梶原正昭 『軍記文学の位相』(汲古書院、一九九八・三)。

【雑誌論文】

- 崔文正 『『平家物語』の死の様相と論理』(『軍記と語り物』三十号、一九九四・三)。
崔文正 『『太平記』の死の様相と論理』(『国際日本文学研究会集會議録』第十八卷、一九九五・一〇)。
横島真弥 『「ばさら」論―『太平記』を中心に―』(『玉藻』三十四卷、一九九八・九)。
米谷豊之祐 『武士団の成長と乳母』(『大阪城南女子短期大学研究紀要』卷七、一九七二)。

秋山喜代子「乳人について」(『史学雑誌』第九九編第七号、一九九〇・七)。

佐々木紀一「小松の公達の最期」(『国語国文』第六十七卷第一号、一九九八・一)。

渡辺昭五「太平記語り手としての禅律僧」(『国学院雑誌』九九卷八号、一九九八)。

小西甚一「平家物語の原態と過渡形態―本文批判の基礎的態度―」(『東京教育大学文学部紀要』第十三輯、一九六九・三)。

原水民樹「頼長の死を語る男たち―保元の乱伝承考―」(『国語と国文学』第六一卷七号、一九八四・七)。

山下宏明「『太平記』に見る死の諸相―『平家物語』と比べて―」(『国文学 解釈と鑑賞』第五六卷八号、一九九一・八)。

【辞典類】

『国史大事典』第六卷(平凡社、一九九四・二)。

『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八四・一)。